49E20

明治文庫

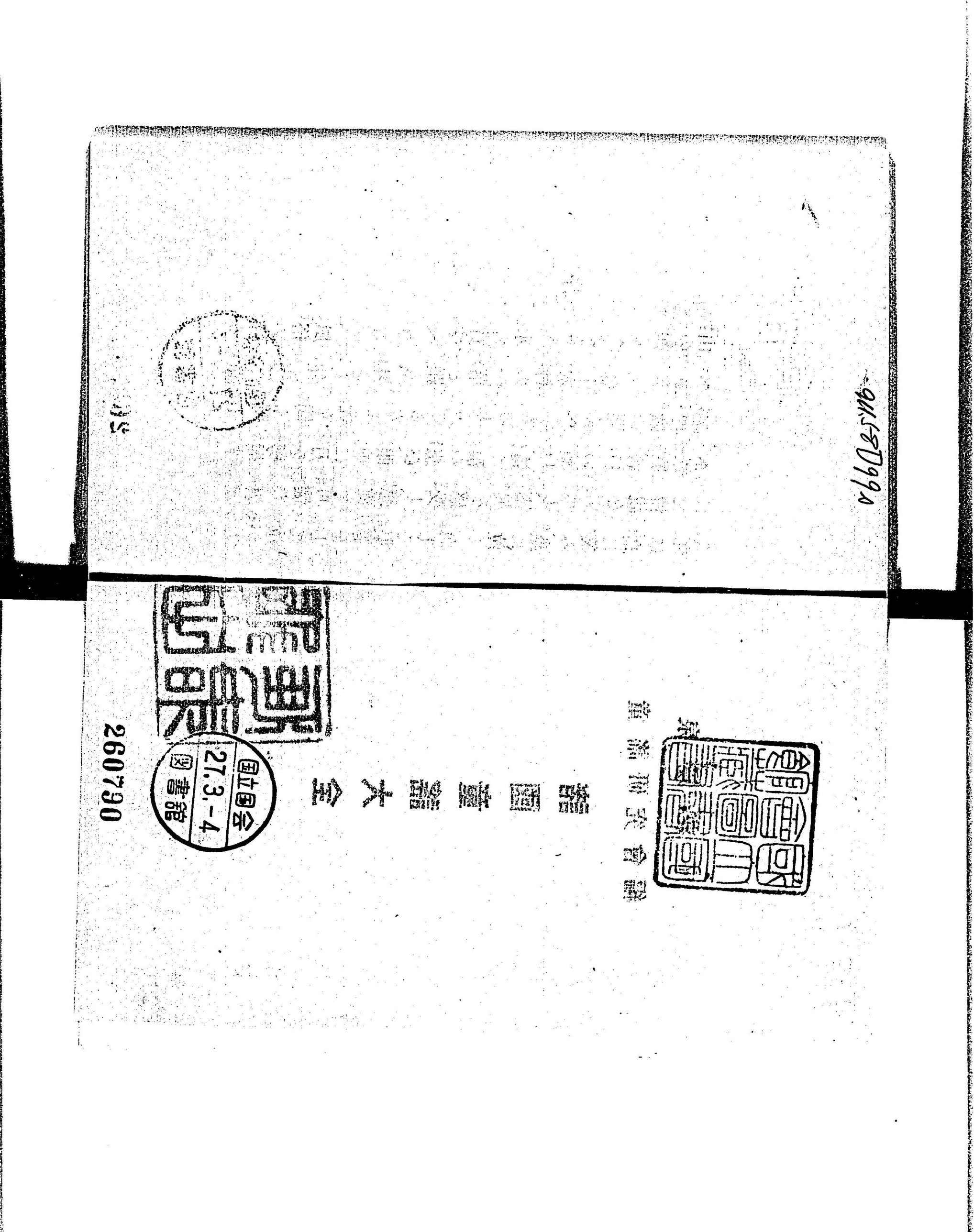
序花鏡泉

童謠研究會編

諸國童謠大全

明治文庫

0457008


東京都千代田区
霞ヶ関
総務庁
総務庁長官
27.3.-4
260790

序

山の觀るべきなく、水の賞すべきなく、風俗の探るべきなき、僻土寒村の一落と雖も、凡そ人住んで、童謠俚歌の聞くべきものあらざるなし。此を聞く時、千本松原、音戸の瀬戸、遠く涙を想ひ、眼前に月を髣髴す。はた傳說を引承し、靈異を感受し、戀愛を可懷む。吾が人類は、鳥に笑み、蟲に泣く。而して渠等をして泣かしむべく、笑はしむべく、石も默頭き、猛獸も尙ほ低徊すべきは、斯の謠の正調曲唱ならずや。花淚子其の趣味に憬憧して、經營十數年、日に日にこれ勉めつゝ、こゝに採錄するもの、其の數約三萬と注せらる。然り、同種の書類の中に未曾有の大集なり。以て我が國到る所の童謠を聞くを得むか。

明治四十二年八月吉日

凡例

一本編は童謠研究會に於て多年蒐集する所のものなり。

一全編を通じて畿内及び八道に分ち、毎國分類別にす。但し東京、京都、大阪の三府は之を卷頭に置く。

一類を分ちて天氣天象、歳時、勞作、手鞠唄、子守唄、遊戯唄及び雜謠となす。

一國別とし、其風土唄を蒐むると雖も、所謂其唄が一國一郡に限られずして、漸く各地方に傳播せるものあり、採否最も難、是に於てか編者は其謠ふ所を聽きて其國と假定したり。

一童謠は、彼の昔噺桃太郎、猿蟹合戰の如く、數十年若くは數百年來、父老の口授相傳せるものなるを以て、其間錯誤多く、一郷一村、亦往々異同あり、加之

方言縱横、意の通ぜざるものすら尠しとせず、編者敢て議することなく、其ま
ゝ之を錄せり、他なし純粹無垢の童謠を玩味せしめんが爲めなり。

一毎章節あり、唄ふ毎に「ヨンヨイ」とか「コレワノセ」とか囃す、節は其知れる限りを附記せり。

一盆踊の類は、衰微して、今は行はれざるも、自から土俗を語る、且又民謠の粹を拔けるものとて、得るにまかせて蒐集せり。

一鞠唄、子守唄には、大體に於て其似寄たるが多し、然り類句と雖も、其間異なれる節あるものは、敢て删除せず。

一本編は殆んど全國の童謠を集めて大成したりと雖も、尙は遺漏あるを免かれず是等は他日補足するの期あるべし。

明治四十二年七月

編者識

諸國童謠大全目次

●東京……一
●京都……七四
●大阪……九二

畿內

●山城國……一一八
●大和國……一三四
●河內國……一三八
●和泉國……一三五
●攝津國……一三八

東海道

●伊賀國……一四二
●伊勢國……一五〇
●志摩國……二六八
●尾張國……二七一
●三河國……二八四
●遠江國……三〇三
●駿河國……三一〇
●甲斐國……三三五
●伊豆國……三四五
●相模國……三五七
●武藏國……三六四
●安房國……三八四

目次

●上總國……三八七
●下總國……四一五
●常陸國……四三二

東山道

●近江國……四五七
●美濃國……四六六
●飛驒國……四七五
●信濃國……四七七
●上野國……五四一
●下野國……五四八
●磐城國……五五一
●岩代國……五五八
●羽前國……五八一
●羽後國……五九二
●陸前國……六〇五
●陸中國……六一七
●陸奥國……六三五

北陸道

●若狹國……六四三
●越前國……六四九
●加賀國……六六八
●能登國……七三三
●越中國……七四九
●越後國……七六四
●佐渡國……七八八

北海道

●渡島國……七九二
●後志國……七九五
●石狩國……七九六
●十勝國……七九八
●釧路國……八〇二

山陰道

●丹波國……八〇五
●丹後國……八〇八
●但馬國……八一一
●因幡國……八一四
●伯耆國……八一九
●出雲國……八二二
●石見國……八三六
●隱岐國……八四六

山陽道

●播磨國……八四七
●美作國……八五二
●備前國……八五五
●備中國……八五八
●備後國……八六〇
●安藝國……八六九
●周防國……八七四
●長門國……八八五

南海道

●紀伊國……八九一
●淡路國……八九八

目次

●阿波國……八九九
●讃岐國……九〇一
●伊豫國……九一〇
●土佐國……九一五
西海道
●筑前國……九二七
●筑後國……九三九
●豐前國……九四四
●豐後國……九四九
●肥前國……九五四
●肥後國……九六三
●日向國……九六九
●大隅國……九七二
●薩摩國……九七四
●壹岐國……九八〇
●對馬國……九八一
●琉球……九八二
●臺灣……九八七
●韓國……九九一

諸國童謠大全

東京

●手鞠唄

○御正々々お正月、松樹て竹立て、喜ぶものはお小供衆、嫌がるものはお老人
旦那の嫌ひな大晦日、大晦日〳〵大晦日の晩に、一夜明くれば源之助が歌留多に
負けて、負けた〳〵は幾何程負けた、金が三兩に小袖が七つ、七つ〳〵は十四じ
やないか、己が姉さん三人御座る、一人姉さん皷が上手、一人姉さん太皷が上手
一人姉さん下谷に御座る、下谷一番伊達者で御座る、五兩で帶買つて三兩で紬て
紬目〳〵に七總下げて、折目〳〵に口紅差して、今年初めて花見に出たら、寺の

和尚に抱き止められて、よしやれ放され帶切らしやるな、帶の切れたは大事じや
ないが、緣の切れたは結ばあれぬ、前で結んで後でしめて、しめた所へ伊呂波と
書いて、伊呂波小供衆は伊勢〳〵參る、伊勢の長者の茶の木の下で、七ツ小女郎
が八ッ子を生んで、生むにや生まれず降ろすにや下りず、向ふ通るは醫者ではな
いか、醫者は醫者でも藥箱持たぬ、藥御用なら袂に御座る、之れを一服煎じて飲
めば、蟲も降るし其子もおりる、若しも其子が男の兒なら、京に上して狂言させ

て、寺に上して手習させて、寺の和尚が道樂和尚で、高い椽から突落されて、笄
落し、小枕落し、おせんや〳〵おせん女郎、汝の挿したる笄は、拾たか貰たか
美しや、拾ひも貰ひも致さぬが、江戸の一息子、女房が無いとて恪氣する、女房
は龜屋のお鶴殿、お鶴〳〵の針箱開けて見たれば雌鳥雄鳥中好し小好し、ホ、ホ螺の

貝、ヒツヒヒラノ貝。
○一イ二ウ三イ四ッおみよの景色を春と詠めて、はーほけきやうや、鶯や〳〵、
偶々都へ上るとて〳〵、小梅のお宿で晝寢して、赤坂奴の夢を見た、枕の下から
玉章が出た、誰れに來いとの玉章が出た、お千代に來いとの文章が出た、お千代
を遣るには物品が要る、上着はちん〳〵ちんちりめん、下着はらん〳〵らんちり
めん。
○御どら〳〵〳〵どら猫さん、お前と私と駈落しよ、何所から何所まで駈落しよ
吉原田甫の眞中で、小間物見世でも出しかけよ、一イ二ウ三イ四ウ五ッ六ウ七ナ
八ア九ノ十ヲ、唐から降ッたお芋屋さん、お芋は一升幾何だえ、三十二文で御座
ります、もうちとまからかちやからかぼん、お前の事なら負けてやろ、笄お出し

舛お出し、庖丁組出しかけて、頭を斬るのが唐の芋、尻尾を切られる八つ頭、向ふのお婆さん一寸お出で、お芋の煮ころばしお茶召がれ、後でおならは御免だよ

○ヨイ〳〵ワイ〳〵早市米の油番所の孫ぢやといふて、いふにいはれぬ伊達者な男、夏は足袋はきばら緒の雪駄、しよなり〳〵と藥師へ參る、そこでお幾が聲かけたらば、遲うごんすよ友八樣や、酒を買ンしよか奈良茶をとろか、酒も嫌なら奈良茶も嫌よ、本町二丁目の糸屋の娘、姉は二十一妹は廿歳、妹ばしさに宿願懸けて、伊勢へ七度熊野へ三度、愛宕樣のお山には、お山には、雁が三羽ついとほる、先なる雁に物問へば〳〵、私は知らんとつい通る〳〵、後なる雁に物問へば物問へば、私も知らんとつい通る〳〵、中なる雁に物問へば、私は些つと物識で、此山塚して堂建つて〳〵、堂の周圍へ罌粟よ蒔いて、罌粟よ蒔いて、罌粟花の咲

くまでは〳〵、子供衆〳〵花折りに、一本折つたらお手に持ち〳〵二本折つたら腰にさし〳〵、三本折るまでに日が暮れて〳〵今夜は何所へ泊らうな〳〵、お爺のお部屋へ泊らうか〳〵、お爺のお部屋にや蛇が居る〳〵、蛇でもないもの繩ぢやもの、お婆のお部屋へ泊らうか〳〵、お婆のお部屋にや猫が居る〳〵、猫でもないもの綿ぢやもの、姉御のお部屋へ泊らうか、姉御のお部屋にや獅子が居る、獅子ではないもの裁片ぢやもの〳〵、まづ〳〵一貫御貸し申した。

○大門口から揚屋町、三村辨村米屋町、皆道中、美事の事よ、春さき千代なげ龍田の善光寺。アノヤ、コノヤ、ヤツコノヤ、向見ひしやい新川見しやい、龍田川の川の帆かけ船が二挺續く、〳〵、三挺續く、續いたお船におん客乘せて、おん女郎乘せて、後から屋形へ押しかける、〳〵、船頭止めろ、とめたら汝等に御酒

やろな、御酒ヤ要らぬ、おん御酒要らぬ、汝等に構ふと日が暮れる〳〵、お月もお出やるお星もお出やる、三月三日は奉公人衆の出がはり頃で、おさらば、さらば。

○大門口、揚屋町、三浦高浦米屋の君、皆々道中見ごとなと、ふりさけ見よならば花紫、相川清川あい逢染川、錦あはせて龍田の川、あのせ、このせ、やつこのせ向見イさい、新川見イさい、帆掛船が二艘續づく、あの舟に御女郎乗せて小女郎乗せて、跡から屋形が押かゞける、ヤレ留ろ、船頭留ろ、留たら汝等に五升遣るぞ、五升入らぬ三五升入イらぬ、わいらにかまふと日が暮れる、日は暮れる、お月は出ヤる、夫で殿御のおん心、それ百よ、それ二イ百よ、それ三百よ……どゝめて〳〵一貫貸した。

○向ふ見しヤい新川見しヤい、帆かけ船が二挺つゝく二挺續く、三挺續く、續い

たお船に花魁乗せて、おん客乗せて、後から屋形が押かける〳〵、船頭止めろ、とめたら彼等に御酒やろな、御酒いらぬ、千ごしも要らぬ、汝等に構ふと日が暮れる、お月も出ヤる、お星も出ヤる、三吉役者は今流行る〳〵、お江戸で流行る。

新川のお梅さんは、目元に化粧して、江戸さき庄屋へ貰はれた、この庄屋は伊達な庄屋で、衣裳を買ふたが、上は小紋に下は縮緬、中は格子のそれはし、そのそれ橋渡るものとて渡らぬものとて、彼方で打たれて此方で打たれて、鳥川へ身を投げた、身は沈む、髪は浮きヤる、そこで取るものは御心。

○向ふ横町のお稲荷さんへ一錢あげて、ちよいと拜んでおせんの茶屋へ、腰を掛けたら澁茶を出して、澁茶よこ〳〵横目で見たらば、お土の團子かお米の團子かお團子團子、先々一貫貸しました。

○おらが隣の山王大べら坊、聞けば兩國の獵人に負けて、一兩二兩なら立て代へてもやらうが小判三百兩に刀が三星、夜着が二十一小袖が七つ、藝者何處行く薩摩の山に、薩摩山から谷底見れば、小さな子供が石を拾ふて砂で磨いて鑢にかけて、紙へ包んでお小屋に投げて、おこや女郎衆が金と思ふて、金ぢやござらぬ小石でござる、あのまたねこのまた、その關のね、奥の女子がね、餅を買ふては行くわいな、酒を買ふてはいくわいな、まづ〳〵一貫貸しました。

○向横町を通り抜け〳〵、女を三人出逢はし、一人の女はぢやらけて居る〳〵窓を開けて髪結ふて、一尺八寸粉出して、一束の元結皆んな卷いて、卷いてもとが見れば顔隱し、若衆が見れば恥かしながらお茶を出す〳〵。

○おぶんぶん〳〵加賀樣屋敷ぢや、おけさ米搗く粉糠が落ちる、何とて落ちるサ

ッサしちく竹、サッサはちく竹、向ふの〳〵格子造の、白壁造りの、赤い暖簾のかゝつた、お姫樣までお渡し申さスッスッスッスッ。

○おねんじよさあよ、およねじよ十よ(二十、三十……と算す)

○おねんじよ寢て居る、金持は稼げ、山の中にはうづきどの、亭主はシッかり者で、洒落者で、袷ぢや寒い、布子で十よ。

○色白で、いろさきしろやへ貰はれて、其しろやは伊達のしろやで、夏は何にを着せまあしよ、きし繋ぎの金襴緞子に藍紫を七重ね、七重ね八重、重ねてお呉れよ紺屋樣、紺屋なあれば染ても上げましよ張つても上げましよ、形は何んとお附けえやる、其の姿にゆさゆさり牡丹に、水に揉れた水淺黄、其水は何處へ流れる、お初の袂へ朝から晩まで流れ込む、やれ止める、船頭止めろ止めたら私等にごし

や呉れろ、ゴシャイラヌ、三ゴシャイラヌ、我等に構と日が暮れる、日が暮れるお月が出やる、新宿女郎衆にのしかあけて、おちやの雀がお鷹に取られて、あれはちやんぼ、これはちやんぼ、先づ〳〵一かん御貸し申した。

○奴の出の子のお子好なれども、新吉原から、しのじの八丁、遠山がくして、をこんでをこにの出替り、しやァしてば身に持たぬ、おすらさゝおン前、お前のせんぞく、からすめのぶウどん、ぶウんばアりよウして、けーしよ〳〵へ乗せて、藝者は何處行く薩摩の山へ、薩摩山から谷底見れば、小さな小供〳〵が碁石を拾て、砂で磨いて、鑢を掛けて、お紙へ包んでお小屋へ出せば、お小屋女郎衆が金かと思て、金ぢや御座るまい碁石で御座る。

○一二、三四、五六、七八、九と一十や、廿や、卅や、四十や、五十や、六十や

七十や、八十や、九十九貫目おてさま三六。

一月、一夜明ければ門松禮者に、鳥追萬歳、道中雙六、お寶〳〵、大紙鳶揚げたり、はないち(穴一の)獨樂とで、姉さん羽子つき、大きなあいでお尻振り振り廻す

二月、稲荷祭や、うちこぢう、どん〳〵、かつかに藤棚のぼり强飯、油揚、狐は滿腹、繪馬や樂屋と、神樂の馬鹿囃。

三月、花の彌生は向島、酒機嫌で土手をば三圍り、お茶屋の姐さん一拳來なされ歸路は夜櫻花魁ながめて格子で首挾む。

四月、四月八日はお釋迦の誕生。如何に宗旨を擴めるとて、お酒も呑まずに甘茶を呑んで、べん〳〵草花、戴き肴で、裸體で踊り出す。

五月、幟や粽に柏餅、菖蒲刀や神功皇后、義經辨慶、加藤の虎狩、鐘馗が睨める

鬼奴が怖がる大きな聲をあげ。

六月、日吉山王へ祭禮どん〳〵、かぐらにつゞいて。年番稽古に、手古舞に地走り屋臺、すつてんてれすこ、蛇の目の傘お祭番附。

七月、色紙あげなす七夕祭、軒の燈籠や盆々踊、吐嘘きや舌抜く十六日には、地獄で鬼奴がお釜の蓋開け閻魔の笑顔。

八月、兎何見て跳ねまする、十五夜お月を見るから浮かれる、搗ぬき團子に、薄に芋栗、枝柿枝豆、大きな蛤、皆さん好きだんべ。

九月、芝の神明樣、菊月御祭禮、お茶屋の姐さんどんかち吹矢、芝居に輕業曲馬の竹澤、千木箱飴菓子、名代の甘酒、生薑の土産物。

十月、恵比壽講店中で、旦那に内儀さん、番頭に小僧、おさんも浮かれて滑つて

轉んで向脛剝いた。

十一月、勇み姿で酉の町、向鉢卷熊手を擔いで、熊手の附物、おかめにみの桝、眞黑げにけん〳〵の生へたぶら〳〵かしうだま。

十二月、暮の十七八日淺草市で、注連か飾か、伊勢海老橙、弓毬に羽の羽子板、金のついたる大きなお松茸。

○此處は何處々々佐竹樣々々〳〵、一人娘をやるからにや、やるからにや、打ちも叩きもしなさんな、しなさんな、奥の座敷に据ゑといて、据ゑといて、金襴緞子を縫はせたり、縫はせたり、ほオろりほろりとお泣きやる、お泣きやる、何が悲しうてお泣きやる、金襴緞子が縫へませぬ〳〵、それなら出て行け叩き出せ、はたきだせ、よい〳〵わい〳〵はないちごまの、油會所の孫ぢやといふて、いふに

いはれぬ伊達者の男、夏も白足袋ばら緒の雪踏ぢやら〳〵ぢやらつくばかり遅うござんす、友八さんよ、酒を買ンしよか奈良茶を買よか、酒は禁物、奈良茶は嫌よ、本町二丁目の糸屋の娘、姉は廿一妹は廿歳、妹欲しさに御祈願かけて、伊勢へ七度熊野へ三度、愛宕様へは月まゐり〳〵、愛宕の山に雀が三疋とまつて、一羽の雀のいふ事にや、此山崩して堂建つて、堂の周囲に罌粟植ゑて、一本折つてはお手に持ち、お手に持ち、二本折つては腰に差し、腰に差し、今夜はどこへ泊らうか、泊らうか。お祖父のお部屋へ泊らうか、泊らうか、おぢゃのお部屋にや蛇が居る、蛇が居る、蛇ぢやないもの縄ぢやもの、今夜はどこへ泊りませう、泊りませう、お祖母のお部屋へ泊りませう、おばゃのお部屋にや猫が居る、猫が居る、猫ぢやないもの綿ぢやもの、綿ぢやもの、そいでまづ一貫貸しました、貸し

ました。

○こゝは何處々々佐竹様々々様、奥ぢや米搗く粉糠が落ちる、なんとておちる七升八升だけ九升ばかり、己が隣の猿松殿に、昨夜惠比壽講に呼ばれて行つたら鯛の吸物小鯛の焼物、一杯おすゝらすゝら、二杯おすゝらすゝら、三杯目には名主の權兵衛に、肴が無いとて囃されて、囃されて面目ないとて烏川へ身を投げた、身は沈む、身は浮けどもそこが女子の御心、皆さん合點か、大阪合點か、合點ならば一二三四おみよの吉原、竹田のからくり、奇麗にきざんで袂に入れて、袂がつん〳〵つんぬけた〳〵。

○鎌倉橋のどんばこに、羽が一本、目が一本、一の木二の木三の木四の木五葉の松やるよ、柳の下の坊さんが、文を一本拾つて、その文や誰ンだ、田舎の婆さん

だ、ハクショハクショナ十よ。
○明神様と荒神様と、赤いぼッくりはいて、ぼ〳〵〳〵〳〵兎々〳〵何を見て跳ねる、十五夜お月を見て跳ねる、ヒヨイ〳〵〳〵。
○おんとん隣家のおかめ女郎は、目が細くて、鼻がじやくれ、歩く姿は蟹の横這べコ〳〵、べコ〳〵。
○一に一畑お薬師様よ、二には日本の日光様よ、三に讃岐の金毘羅様よ、四には信濃の善光寺様よ、五ッ江の島辨天様よ、六に六角堂の觀音様よ、なゝつ七浦の天神様よ、八ッ八幡の八幡様よ、九ッ高野の弘法様よ、十で處の氏神様よ、懸けた願なら解かねばならぬ。
○おん京京橋、なんなん中橋、あすは十六大振袖よ、お化粧なされや薄化粧なさ

れ、あんまり濃いのも人目にかゝる、奥の障子を細目に開けたら、お油たら〳〵お白粉ちら〳〵、萬歳や〳〵、夕べ豆腐どうした、あんないをさめて、こんないをさめて、をさらば〳〵、山王のお猿さまは赤いおべゝが大好き、手々しやれしやれ、夕べ恵比須講に招ばれて行つたら鯛の吸ひ物、こじよろのまきもの、一つばい、おすゝら、すらすら、二はいおすらすら、三ばい目にはなしゝの權兵衛さんが魚が無いとてお腹立て、はらたつても面目ないとて、烏かはらに身を投げた、身は沈づむ、お風が吹けども、そこで其の子のおんこゝろ、はてな〳〵はて〳〵な、お父さんのお歸り、阿母さんのお歸り、奴の煤掃き、とんぱた〳〵、それでまづ〳〵一貫お貸し申して、おたゝのたゝたのた、一、二、三。
○おん白白白、白木屋のお駒さん、才三さん、店には丈八色男、奥の〳〵梅の木

に、雀が三羽とまつて、一羽の雀のいふことにゃ、父さん母さん聞きやんせ、
私が大きくなつたらば、なつたらば、上野の山に店出して、莫蓙を三枚莚を三枚
合せて六枚鴉の行水、羽がばたゞ、やにがつまつて、ぎう〳〵。

●

一ッとや、一と夜明くれば賑やかで〳〵、お飾り立てたり松飾り〳〵。
二ッとや、二葉の松は色ようて〳〵、三階松の上總山〳〵。
三ッとや、皆様小供衆は樂遊び〳〵、あないちこまどり羽子を突く〳〵。
四ッとや、吉原女郎衆は手鞠つく〳〵、手鞠の拍子は面白や〳〵。
五ッとや、いつも變らぬ年男〳〵、お年もとらぬに嫁を娶る〳〵。
六ッとや、無理よりたゝんだ玉襷〳〵、雨風吹けども未だとけぬ〳〵。

七ッとや、何より芽出度いお酒もり〳〵、三五に重ねて祝ひましよ〳〵。
八ッとや、やいはらやいこは、お千代の子〳〵、お千代が育てたお子ぢやものお
子じやもの。
九ッとや、こゝへ御座れや姉さんや〳〵、白足袋雪踏で、ちやらちやらと〳〵。
十とや、歳神様のお飾は〳〵、橙九年母、ほんだはら〳〵。
十一とや、十一吉日や倉開き、お倉を開いて祝ひませう〳〵。
十二とや、十二の神樂を舞ひ上げて〳〵、歳神様へ舞ひ納め〳〵。

●

一とや、人を見おろす師直が、かほよに戀慕の其旨を、話さうかいな。
二ッとや、深編笠の虚無僧が、刀の手の内御無用と、本藏かいな……。

三ッとや、身の上知らずの九太夫が、主人の逮夜の蛸魚、はさまうかいな……。
四ッとや、夜討の面々打揃ひ、山と川との合言、交はさうかいな……。
五ッとや、猪打たんと勘平が覗ひ外した二ッ玉、はなさうかいな……。
六ッとや、迎ひの四ッ手に是非も無く、お輕は身を賣る祇園町、うりやうかいな。
七ッとや、何心なく由良之助は、耳にこひ口鍔の音、起さうかいな……。
八ッとや、山中尋ねて遙々と、小浪と力彌の盃を、さゝせうかいな……。
九ッとや、九ッ梯子を屋根へかけ、可嫌がるお輕を無理やりに、おろさうかいな。
十とや、とうと敵を打ちをさめ、主人の墓所へ師直を、手向けうかいな……。

●

一ッとや、人の氣にあふ口にあふ、あづまに名高い料理もの、八百善か。

二ッとや、風流風雅の會席は、ことさら名代の洗ひ鯉、大七か。
三ッとや、三筋の絲のつれ彈きに、つなぎとめたる川岸の船、川長か。
四ッとや、四ッの時節に取り合せ、時の趣向も深川の、平清か。
五ッとや、いざことゝはん都鳥、こゝは橋場の川口か、有明樓。
六ッとや、武藏の國と下總の、中に中々名も高き、中村屋。
七ッとや、奈良の都にあらねども、この手拍のふたおもて、柏屋か。
八ッとや、彌生の綠の春風に、招き込んだる、角の梅、青柳か。
九ッとや、
十とや、年をふるやの陸まじく、田舍にならぶる軒と軒、海老屋扇屋。

●

一ッとや、人のしやくりで切られうか、なほれうか、骨身になつても切れやせん
奴紙鳶。

二ッとや、蓋する樣に隱くせども、逢へば互ひの色に出る、屠蘇の酒。

三ッとや、みんなお前の爲ぢやもの、ためぢやわいなア、人にははねぢやといはれても、羽子板か。

四ッとや、夜中にふッと目を覺し、見し夢を、鬱いで自烈裂く枕紙、寶船。

五ッとや、出雲とやらの神さんが、結びやしやんした緣と思へば切れはせぬ、福引か。

六ッとや、昔も今も戀の道、色の中、ふせても人には悟られる、歌賀留多。

七ッとや、何をいふにもあどけなき、お前と私は親がゝり十六ひさし。

八ッとや、やさしくいはれる異見でも、私やいやよ、離れ〳〵は氣にかゝる、貝合せ。

九ッとや、この土地ばかりに日は照らぬ、二人して行つて見たさの上方へ、道中双六。

十とや、とけて嬉れしき春の夜に、一ッ夜着。二人で着て寢るお目出度き、注連飾。

●手玉唄

○おじやみ、おひと、おふた、おみい、およう、お五、お六ッ、なつてくりよ、

とんきり、おじやみじやくら、おふた櫻、おみいざくら、お四櫻、お五櫻、お六ウ櫻、お六ッがへし、とんきり、お七ッさらり、ひとよせ櫻、おひとおぬけ、お二々おぬけ、お三おぬけ、お四おぬけ、お五おぬけ、お六おぬけ、ひとよせおぬけ、ぬけた、とんきり、一貫貸した。

○お馬の乘りかへ、お駕籠の乘りかへ、とんきり一貫貸した。

●羽子突唄

○一人來な、二人來な、見てきな、寄つて來な、何時來ても、むづかし、なんの藥師、こゝの前ぢや、十よ。

○一人來な、二人來な、見て行きな、寄つて行きな、何時來て見ても、七子帶を

やぐるまにしめて、こゝのよで一丁。

○ひとめ、ふため、みやかし、よめご、いつやの、むさし、なゝやの、やさし、こゝのや、とを。

○ひとごに、ふたご、みわたしや、よめご、嫁御の尻に、ねぶとができて、おいたちこ、こいたちこ。

○一と子に双子、見渡しや嫁御、いつ來ても難しい、何の藥師こゝの前ぢや十よ

○油屋お染、久松十よ。

●子守唄

○ねん〳〵ころ〳〵ころ〳〵よう、おころり小山の雉子の子は、泣くとお鷹に捕

られます、だまつてねん〳〵ねん〳〵よ、ねんねの守はどこ往つた、お山を越えて里へ往た、お里の土産に何貰ろた、でん〳〵太鼓に笙の笛、おきやがり小法師に振鼓、叩いて聞かすに寢んねしな。

○ねん〳〵よ、ころ〳〵よ、ねん〳〵小山の兎は、なぜお耳がお長いね、お母さんのお胎に居た時に、椎の實、萱の實(何によらず讀み込む)を喰べて、それでお耳がお長いよ。

○千疊座敷の唐紙育ち、坊樣もよい子に成る時は、地面を殖やして倉建て、倉の隣に松植ゑて、松の隣に竹垣立て、竹の隣に梅垣立て、梅の小枝に鈴下げて其鈴ちやら〳〵鳴る時は、坊樣も嘸々嬉しかろ。

○寢んねん、猫の尻に蟻が這ひ込んだよう、ヤツトコスツトコほじくり出したら

又這込んだよ。

○ねんね寢て呉れ、およてくれ、およれば子も樂親も樂、守は樂な樣で辛いもの、親に叱られ子に泣かれ、友達小供にやいぢめられ、早く三月來ればよい、風呂敷包に下駄さげて、お神さん左樣なら、旦那さんに宜敷、今に見やがれどうするかどぶの中へけツころがして泳がせる。

●ちよち〳〵あワ、

○ちよち〳〵あワ、、かいくり〳〵雞の目、お頭てん〳〵臂ぽん〳〵。

●あんよはお上手

○歩行はお上手、轉倒はお下手、こゝまでお來で、甘酒進上。

●大きな赤ン坊

○大きな赤ン坊、飴買つて舐ぶれ。

●天氣天象の唄

●月の唄

○お月様幾ッ十三七ッ、まだ歳や若いな、彼の子を產んで、此の子を產んで、お萬に抱かしよ、お萬何所行つた、油買ひに茶買ひに、油屋の前で、滑つて轉倒んで、油一升滴した、その油何うした、太郎殿の犬と、次郎殿の犬と皆な舐めて了つた、その犬何うした、大皷に張つて、皷に張つて、あつちを向いちやドンドコドン、此方を向ちやドンドコドン。

○大切なお月様雲奴が隱くす、迚も隱くすなら金屏風でお隱くし申せ。

●星の唄

○一ッ星めつけた、長者になアれ。

●夕燒の唄

○夕燒こやけ、明日天氣なアれ。

●雨の唄

○日が當つて雨が降つて狐の嫁入。

●雪の唄

○雪や氷、おべたい氷。

○雨こんこんや、雪こんこんや、お裏の茶の木にチヨイトとまれ、こんや。

●風の唄

○お太陽さま強いな、風の神弱いな。
○風吹け、どう吹け、どうどの山で、麥一升遣るから、どうどうと吹ウきやれ。
○風吹くな、なふくな、水戸樣の屋根で、金羽根拾つて、およばねこばね。

●動植唄

○鳩ぽつぽ、豆がたべたい。
○烏、烏、勘三郎、親の恩を忘れなよ。
○ごろすけほうこ、むだぼうこ。
○雀のあつまり、チイ、チイ、バツバ、だれにあたつても怒るなよ、怒るなら最初から加らんがよい。

○おほわた來い〳〵飯食はしよ、まんまがいやなら魚食はしよ。
○蝶々、〳〵、菜の葉にとまれ、菜の葉があいたら櫻にとまれ（菜の葉が嫌やなら手に止まれとも云ふ）
○蝶々蜻蛉も鳥のうち、山に轉るのは、松蟲、鈴蟲、轡蟲、オツチヨコ、チヨイノチヨイ。
○ぎんヤウー、ちやんめの子高法度、低通れ、あつちへ行くと、閻魔がにらむ（居るぞとも云）こつちへ來ると赦してやるぞ。
○鹽や、鐵漿や、やんまかへせ。
○おいらアうちィけへろ、蛙が鳴くよ。
○かへろ（蛙）が鳴くからかへろ。
○螢來い、山見てこい、行燈の光をちよつと見てこい。

○兎々〳〵、何に見て跳ねる、十五夜お月様見てはァねる「朔日十五日〳〵、朔日十ウ五日に二十ウはァちんち。

○鰕屁、かいたち屁、流しの下で屁を放れた。

○蟹ャ飯たけ〳〵。

○まいまいつぶろ、湯屋に喧嘩があるから角出せ鎗出せ。

○蝸牛、かいつぶり、湯屋で喧嘩があるから角出せ鎗出せ。

○蝸牛、角出せ鎗を出せ、挾ン箱出しやれ、出さぬと〳〵、表に喧嘩があるぞ。

○てんと虫〳〵、太陽様のお使ひに行つて來い。

○チョンベャのンベ、杉の根の下の糞蟲、阿父さんのお茶椀どの位。

○西やどーッち。

○米舂いたら放そ、米舂いたら放そ。

○やんまうし〳〵赤蜻蛉。

○あぶ蜂とんぼ、きり〳〵すの親方。

○蚓蚪は何爲髪結はぬ、油元結が無いから結はぬ。

○馬よ〳〵、豆一升與るから腹太皷敲け。

○雁々三ッ口、後の雁が先きになッて、笄とらしよ。

○鳶とろゝ、油揚與るから舞つて來い。

○蟷螂々々、嘘を吐くと指が腐れるぞ。

○蝦蟇の指や腐れ指、己らの指や金指。

○蜂が螫すと子を捉るぞ。

○猿の尻ア眞赤いな、午蒡燒いておッつけろ。
○己らの所爲ぢやないと、三年烏の所爲だと、火鉢の囘りに取ッつくな、親にも子にも取ッつくな（動物を殺生したる時に云）
○目かち目白、目のない鳥は、鐵砲に擊たれて、こけこッこオ。
○見たら木兎、飛んだら鳶、跳ねたらハネ虫。
○梅干さんといふ人は、足から顏まで皺よつて皺よつて、あれは酸い、これは酸い。
○向ふの山の相撲取り花は、エンヤラヤと引けば、お手々が切れる、お手々が切れた、お藥無いか、赤いのもある、白いのもある、同じくなれば、赤いのにしやうよ。

○つくしんぼうや、どうしんぼう、彼岸の入に、袴はいて出やれ。
○桃栗三年柿八年、柚は九年でなりかゝり、梅はすいとて十八年。
○南瓜が芽だいた、花が開いた開いた、エッサッサ〳〵。
○橙父さん、榧母さん、密柑姉さん、金柑小僧。
○金柑や何しるよ、阿母ちんに抱かれて乳呑むよ。
○こゞめ（杉の芽）〳〵、一つのこゞめは二つになれよ。
○梅の木、桃の木、山椒の木。
○梅干嚙むとも核嚙むな、中に天神寐てござる。

●歳時唄

○お正月がござッた、どこまでござッた、神田までござッた、何に乗ってござッた、譲葉に乗って、ゆづり〳〵ござった。

○お正月はよいもんぢや、油のやうな酒呑んで、木ッ葉のやうな餅食って、雪のやうな飯くって、これでも父さん正月か。

○稲荷講、萬年講、お稲荷さんのお初、お十二銅おあげ、おあげの下(段とも云)からおッこッて、赤い口口擦り剝いた、膏薬代をお呉れ、呉れない内はいごかない、繪にかいた地震よ、壁にかいた口口よ、奥ふる時「豪勢々々、金庫建てろ、奥へざる時「貧乏貧乏。

○汐干に參りましよ、大きな蛤十ばかり。

○天王様だ、お神輿だ、萬燈點けろ、燈火を點けろ、ワッショイ〳〵、揉め〳〵

○柳の下の鷺様は、朝日に照られてお色が黒い、お色が黒けりやがんぐり傘おさし、がんぐり傘いやよ、がんぐりがさいやよ、お江戸で流行る、蛇の目傘、蛇の目傘。

○こなたの屋敷は、奇麗な屋敷、奥の間で三味線、中の間で踊り、臺所までも笛太鼓、笛太鼓。

○大晦日の晩に、重箱拾って、開けて見たればふわ〳〵饅頭、つかんで見たれば牛の睾丸。

○大晦日の晩に、松を一本祝ひましよ。

●盆唄

○盆々々の十六日に、お閻魔様へ參ろとしたら、お珠數が切れて、鼻緒が切れて、南無釋迦如來手で拜む、手で拜む、手では拜まぬ蓮の葉で拜む、蓮の葉はとんと萎草々〳〵、萎れた草を櫓へ上げて下から見れば胡瓜の花、ぼけた〳〵何處までぼけた一の丸越えて、二の丸越えて、三の丸先へ、堀井戸堀つて、井戸は堀井戸、釣瓶は黃金、先へ蜻蛉がとまつて、やれ飛べ蜻蛉、それ飛べ蜻蛉、飛ばんと羽をきりきりす、飛ばんと羽をきり〳〵す、きりこ〳〵、誰方樣細工、お若衆樣のお手細工お手細工。

○一の丸越えて、二の丸越えて、三の丸先へ、堀井戸堀つて、堀は堀井戸、釣瓶

は黃金、黃金の先へ、蜻蛉がとまつて、やれそれ蜻蛉、それそれとんぼ、飛ばなきや羽を、きり〳〵す、切子が燈籠、きりこが燈籠、切子が燈籠は、誰方の細工御あかし樣のお手細工、お手細工。

○盆の十六日、遊ばせぬ親は、木佛、かな佛、石佛、石佛。

○お盆が來たから髮結てお呉れ、島田がよいか、唐子がよいか、島田もいやよ、唐子もいやよ、お江戸ではやる、おさげ髮。

○盆の牡丹餅や、三日置きや腐さる、お婆これ見や、毛が生へた。

○盆々々は今日明日ばかり、明日は嫁の萎草萎草、萎れた草を櫓へあげて、下から見れば胡瓜の花〳〵。

○長い〳〵兩國橋長い、お馬で遣ろか、お駕籠でやろか、お馬も嫌よ、お駕籠も

いやよ、十六七に手を引かれ〳〵。

○長い〳〵、兩國橋長い、長い兩國橋納涼に出たら、お子樣がたが、屋形の船で彈くや語るや、やれ面白ろや、やれ面白ろや盆踊り。

●盆踊（佃島）

○踊れ人々目出たい盆ぢやア、五穀實りて大風もなし、是も神恩佛の恩ぞ、恩を思はゞ信心起せ、信に德あり數へて見やれ。

一チに　一世の災難のがれ
二には　日夜に氣を和らげて
三に　三毒消滅するぞ

四には　自然と家富榮え
五には　後生の疑ひ晴れん
六に　六親皆むつまじく
七に　七福其身に備へ
八に　八大地獄に墜ず
九には　九品の淨土へ生れ
十ヲに　十方諸佛のたすけ
わすれまいぞよ朝夕ともに、信の一字が身の肝要と、座外に唱へる南無阿彌陀佛

（五世川柳作）

●勞作唄

●木遣節

○芽出度々々の若松様よ、ヨウーイヤヨウイヤサ、枝も榮えりや葉も茂る、エ、ヨウーイヤサヨウイヤサ、エンヤラヤレコノサ、葉も茂るヘコレヲモセエンヤラヨ。

○淺草出茶屋の娘の小萬は、ヨウーイヤヨウイヤサ、花か紅葉か、花なれば一枝折たやエ、ヨウーイヤヨウイヤサ、エンヤラヤレコノサ、ハモセヘコレヲモセ、エンヤラヨ。

●土方唄

○音頭「ヨイトコマケ　一同「ヨイトコマイタ。

○ヨイセ〳〵……ヤレコノエンヤラヤー。

●遊戯唄

●兩拳

○ジャンケン（兩拳の）ポン、〳〵よ。

○石紙ジャンよ、鋏無しジャンよ。

○オイモノ（多數者）ジャンよ。

○チッ〳〵チッ（男子に限る）

●鬼遊びの唄

○鬼ごつこ、するもの、寄つといで（又寄つて來なとも云）

右は鬼遊を始むる時、人寄せの唄なり。

○鬼の居ない内、洗濯ジャブ、ジャブ。

○一人覗ひ三度鬼。

○小使タンコ。

拇指と食指にて輪形を作り、之をタンコと云、一時休戦用便の符號。

○一ぬけた。

已一人此遊を脱する時いふなり、之を聽きて他童は、一齊に、

○一飯滴した、泣き泣き拾つた。

と嘲弄す、又鬼自身此遊を脱する時に。

○鬼ぬけ間抜け、太鼓背負つて逃げろ。

●影や、とうろくじん

○影や、とうろくじん、十三夜の牡丹餅。

月夜影を踏みて遊ぶなり。

●お臀の用心

○お臀の用心小用心、今日は廿八日、明日はお龜の團子の日。

●廻りの〳〵小佛

○廻りの〳〵小佛、何爲丈が低いね、親の前で魚食つて飯食つて、それで丈が低いな、後ろの正面誰アれ。

●籠目かごめ

○籠目かごめ、籠の中の鳥は、いつ〳〵出やる、夜明けの晩に、ツル〳〵辷べつた。

●開らいた〳〵

○開らいた〳〵、何の花開いた、蓮華の花開いた、開いたと思つたら、漸とこさと莟んだ、莟んだ〳〵、何の花莟んだ、蓮華の花莟んだ、莟んだと思つたら漸とこさと開らいた。

●淀の川瀬の水車

○淀の川瀬の水車、どんどと落ちるは瀧の水、ちよろ〳〵落ちるはお茶の水。

●おヒやのかたまり

○お雜炊の固まりエッサッサ、お粥の固まりエッサッサ、

肩と肩とに手を懸けて、群童一團となり、斯く唄ふ。

●どん〳〵橋

○どん〳〵、橋渡れば狐が通る。

●女と男と豆炒

○女と男と豆炒り、炒つても〳〵炒り切れない。

童男童女打交りて遊べる時、他童來りて之を罵るなり。

●お山の大將

○お山の大將、己一人、後から來る者つき落す。

土の盛り上りたる頂に駈け上り群童を瞰下しつゝ手を擴げて唄ふ。

●獨樂遊

○甲天下。乙お側。

●鼬どん〳〵

○鼬どん〳〵、昨夜の稲は、鼠が引いた、鼠どん〳〵、昨夜の稲は、狸どんが引いた狸どん〳〵昨夜の稲は、貉が引いた、その貉どうした、隣の炮烙婆に聞いて見ろ。

●坊さん〳〵

○坊さん〳〵どこ行くよ、私は田甫に稲刈りに、私も一緒に行きませう、お前が來ると邪魔になる、お寺の〳〵糞坊主、後ろの正面誰れ。

●雛一ッちよお呉れ

○雛一ッちよお呉れ、どの雛よかろ、ちよいと見ちやあとの子、何で食はせう、

魚で飯食はせう、小骨が立つ、嚙んで食はせう、唾がつうく、乾して食はせう、太陽蟲たかる、觀音樣のじや〳〵豆十買つて食はしよ、それは蟲の大毒、一匁、否々、二匁、否々、三匁、否々、四匁、否々、五匁、否々、六匁、否々、七匁、否々、八匁、否々、九匁、否々、十匁、モシ〳〵古睾玉が落ちました。

●どう〳〵めぐり

○どう〳〵めぐり、こうめぐり、粟の餅も可嫌いや、米の餅もいーやいや。

●ちやん〳〵ぎり

○ちやん〳〵ぎりやきやんぎりや、爺が歸ッたら飯にしよ。

●子を捉ろ子捉ろ

○子を捉ろ子捉ろ、どの子をみつけた、ちよと見やあの子、さあ捉つて見しやい

な。

●芋蟲ごろ〳〵

○芋蟲ごろごろ、山椒蟲ごろごろ、瓢箪ぼつくりこ、後の〳〵先次郎、何用でござる、夕の牡丹餅どうした、棚にあげて、鼠が引いた、その鼠を持つて來い。（木の葉か何か持つて來る）そんな鼠があるものか。

●道中駕籠

○道中駕籠や空駕籠や、馬より牛より安いな、安いとて三百文。

●草履きんじよ

○草履きんじよ、きんじよ〳〵、流がしの下の菖蒲が咲いたか、まだ咲き揃はぬ妙々車を手に取つて見たれば、しどろくまどろく十三六よ、ぬけたあらどんどこ

しよ。

●藥罐ぼつくりこ

○藥罐ぼつくりこ、茶釜でおいでなさい、裏までいくの、一町先きの肥料屋、だん〳〵誰あれがめつかつた。

●指の遊

○蛇塚のジャン五右衛、汝娑婆にありし時、燒味噌燒いたる科に依り、八萬地獄に墮ちし時、三途の河を急げやいそげ、ワしゝゝ。

○鮴こツこ、鼠こツこ。

○おけら來い〳〵、おけらの蟲は、うじやこい蟲で、雨さい降れば、うじや〳〵。

○こくざう〜やれこくざう。

●紙撚遊

○南無阿彌陀佛とカンカラカンノカン。

○白髯大明神、お髯を頂戴します、お髯をお受取りなさい。

●米やさん搗きやさん

○米やさん、搗きやさん、米屋さん搗屋さん。

●綾取遊

○ペン〜ことかいね。

●河童龜の子

○河童龜の子、足ひいて見やれ。

●筍一本お呉れ

○筍一本お呉れ、まだ芽が一本、筍一本お呉れ、まだ芽が二本、まだ芽が三本、まだ芽が四本、まだ芽が五本。

●縄遊

○おかめジョンジョロ卷き、錠まいた。

●素麺煮麺

○素麺煮麺、冷素麺、陳皮々々々々胡羅匐おろし、お膳を出してお茶椀つけて、お椀をつけて、お香物つけて、お皿をつけて、お箸がないから取りに往こ。

○素麺煮麺、大根卸、蝸殼町豚屋のお常さん。

●鹽や〜

○鹽や〜〜、神田の鹽や。

●千手觀音樣

○千手觀音樣、お宿は何處だ、海越して河越して、其先きにござる。

●お嬢樣お先き

○お嬢樣お先き、己ら後の草履持、草履の代も吳れないで、けちんぼ客嗇坊。

●てんてつとん

○てんてつとん、てとすとんともち米色櫻、色櫻、助さん小間物賣りやすか〜〜私も此頃出世して、社杯勸めになりました〜〜。

○てんてつとん、てとすとんともち米色櫻、色櫻、助さん小間物賣りやすか〜〜私も此頃失策て紙屑拾ひになりました〜〜。

●むことりゐ山

○むことりゐ山の鶯が一羽ね、彼奴差して吳れうと竿取り直した、竿ぢやさゝれぬ、やゝ草で差して吳れう、やゝを忘れて向ふの茶屋へね、一に橘、二に杜若、三に下り藤、四に獅子牡丹、五つい山の千本櫻、六つ紫色よく染めて、七つ南天八つ山吹、九つ小梅の花ちら〜〜とね、十で殿樣葵の御紋ね。

●ずゐ〜〜ずつころばし

○ずゐ〜〜ずつころばし、胡麻味噌ずゐ、茶つぼに逐れて、トッピンシャン、一ぬけたアゝらドンドコショ、俵の鼠が米喰つてチユウ、チユウ〜〜と鳴くのは誰アれです、私イです。

●いッちくたッちく

○いッちくたッちく太衛門どんの乙姫様が、湯屋で壓されて鳴く聲聞けば、チン〳〵マゴ〳〵オシャリコシャリコ。

●茅花つばな

○つウばな茅花、一本拔いちやギイリギリ、二本拔いちやギイリギリ、山越して川越して、お山の〳〵おこんさんは「今御飯たべてます「今お白粉つけてゐます「髮結ふてゐます。「便所で櫛落して拾つてゐる「臺所でつまみ食ひする、おは可笑し、〳〵、キャッー。

●己らのお倉に火がついた

○己らのお倉に火がついた、天に一つ足許に一つ、紺屋のモガリにまだ一つ、山車か萬燈がお飾りか、だしならだしてやろ。

●此所は何所の細道ぢや

○此所は何所の細道ぢや、天神さんの細道ぢや、ちいつと通して下しやんせ、御用の無いもの通しません、この子の七つのお祝ひに、お札を納めにまゐります、通りやんせ〳〵、行きはよい〳〵歸りは怖い。

●千艘や萬艘

○千艘や萬艘、お舟がギッチラコ、ギッチリ〳〵漕げば、湊が見える、お惠比須か大黑か、こちや福の神。

●顔面の唄

○下谷(額)に行つて、毛蟲坂(眉)下りて、目黑(目)に行つて、花(鼻)屋に寄つて

花一本盗んで、お池の周圍をぐるつと廻つて碁石(歯)を拾つた。
○上り目、下り目、ぐるりと廻つて猫の目。

●づぼんぼ

○づぼんぼや〳〵、づぼんぼ腹立ちや面憎や、池のどん龜なりやこそ、ヤレサテづぼんぼや。

●書畫遊

○坊さん〳〵、この橋渡つて酢買ひに(す字)
○お月樣が二つ出て、雨ざあ〳〵、棟星々々々々、ぐるりと廻つて大入道。
○へゝのゝもへし(平面の顔)
○つるまむし(横顔)

○山水天狗。
○米田一八(糞)
○目カ一チョン〳〵の十(助平)

●雜謡

○お提灯ャあぼし、消えたら儘よ。
○鍋々底抜け、底が抜けたら返しましよ。
○人眞似子眞似、酒屋の猫が、田樂燒くとて手を燒アいた。
○おほ寒む小寒む、山から小僧が泣いて來た、何とて泣いて來た、寒いとて泣いて來た。

○ちう〳〵たこかいな。（物を數ふる時に用ふ）

○蛤は蟲の毒（同上）

○誰に遣ろ、彼に遣ろ、夕產れた赤兒に遣ろな。

○あの子何處の子、提灯屋の繼兒、あがつて遊べ、茶碗の缺片で、頭こツきり撲ッてやろ。

○あの子馬鹿の子、提灯買ひに遣つたれば、底ぬけ提灯買つて來て、阿父さんに叱られて、阿かさんにどやされて、雪隱後架に飛び込んで、びいりぐそで滑つて固糞で止まつた。

○いひつけ口、磔口、手前の嗅鳶口。

○正さんが〳〵、まぐそ放つて置いたれば、幸さんが〳〵菰をかけて置いたれば

平さんが〳〵、灰を掛けて置いたれば、長さんが〳〵、ちょッけ出してかん瓶めた。

○萬ちやん饅頭十ヲ食つて、半ちアん半分食ひかけて、源ちやんゲロ〳〵吐き出して、宗ちやんそーッと瓶めに來た。

○鐵ちャん鐵瓶ひッくりかへして火事出した、大屋さん迷惑恥かいた。

○金こ木鼠泥鼠、鼬に逐はれてチウ〳〵。

○庄ッぺ〳〵糠袋、湯屋で拾つた糠袋。

○竹の□□□□は、鈴□□絲しいちやぎいりざり。

○市ちやん越後の國から出た時は、じん〳〵端折に頰冠り、肥桶舁いでオワイ〳〵

○勝ちやん數の子鰊の子、お臀を覗つて河童の子。

○新こ牡丹餅薬罐で揑ねろ、箸で挾んで佛さんに供げろ。
○桑ぼこ父ちやん鉦叩き、一文貰つてカアンカン。
○喜いちゃん木鼠泥溝鼠、鼬に追はれてチウ〳〵チウ。
○吉々ばッた、こうばッた、後架の前で踏ンばッた。
○道ちゃん道々糞たれた、紙が無いとて手で拭いた。
○義ちゃん夜中に嫁娶つて、椎の實口口、口口した。
○重（何によらず名を讀み込む）ちやん、しいぢャなアきャア、しりきしャまの、しいり糞。
○何（同上）ちゃん〳〵何しるの、阿母ちゃんに抱つて屁をたれた。
○テ、テレスク天狗の面、おッかあ〳〵おかめの面、庄ちゃんショットコ槃若の面。

○意地惡る根性の尻曲り。
○いぢわるや、はら立婆ヤ、どヲろぼどろぼ、今年のどろぼに油斷がならぬ、齒かけ婆に茶ア呑ましよ。
○坊主々々山芋、山の中で屁たれた。
○耶蘇味噌てつくわ味噌、それであたまが牛の糞。
○當り御免、割り御免。
○禿げ叩いて嗅いでみな、新澤庵の味がする。
○お洒落、洒落ても惚れてがないよ。
○お前に惚れたほうれん草。早く嫁菜にしてお呉れ。
○按摩盲に當つたら御免、當るさきには居るから惡い。

○お婆どこ〳〵湯屋のかへり、お土産何々、お團子一つ。
○地みたが痛いッて泣いてるよ。
○泣き蟲毛蟲、挾んで棄てろ。
○今泣いた鴉が、ちよいと見て笑つた。
○喧嘩しよ、敵が中橋神田橋、バラ〳〵逃げるは向ふ河岸。
○火事や何所だ丸山だ、牛の口口丸燒けだ。
○案じなさんな、湯屋の煙だ。
○ウンと跨いで糞をしろ、跨ぎ直してたんとしろ。
○歸のる、いのる、いながさきに鬼がゐる、あと見りや蛇がゐる。
○あの姐さんいゝ姐さん、お尻がチット曲がつて、目方にかけたら十匁。

○いゝ(あつた)(らと云)女(男)が荷を背負つた、荷でも背負なさやいゝ女(男)。
○あの姐さん美い姐さん、堺町の眞中で、すべッて轉んで、赤い口口つん出した(擦剝いたとも云ふ)
○あの姐さん美い姐さん、晩の十時に歸るから口口叩いて待つとゐで。
○口口口口しよッぱびー。
○口口來い、口口で來い、此方で罰金取つて遣る。
○坊主口口して縛られた、顱が緩くつて赦された。
○田舍、最中、餡の無い最中。
○異人バク〳〵猫の糞。
○失敬もつけい鼻もつけい、湯屋で拾つた糠袋。

○厄介もッかい鼻もッかい、大きなかいは博覧會、小さなかいは蜆ッ貝。
○あばよ、しばよ。
○竹橋の兵隊さん、足を揃へてテッテケテッテ。
○横濱の調練は、脚を揃へてトッピンシャン。
○兵隊さん、何を喰ふ、餅を食ふ、何うして喰ふ、煮て燒いて何うか斯うか喰ふ
○爺さん酒飲んで酩酊て踏倒んだ、婆さんそれ見て嘔吐はいた。
○分福茶釜に毛が生へた。
○子僧こにして團子にしよ、もう一つまるめて黄粉にしよ。
○山寺の、和尚さんは、鞠を蹴りたし鞠はなし、猫を紙袋にチョイト入れて、ポンとつきやニアンと啼く、ポコラポンとつきやニャーニアンと啼く。

○糸屋の姨さん、糸がこんがらかつたから、ほどいてお呉れよ、お呉れ。
○一人二人三ンめの子、取つて舐めろ糞さらひ、流の下の大入道、箸でかつこめ先次郎、其後かん舐めろ。
○可嫌だ姨さん、土方の女房、できたその子が土鼠。
○ガランピシャン、眞平御免ねえ、私ヤ此の町内の若え者だが、こんど祭りについて、山車をひきイひんまはすんだが、おめんとこの廂が三尺三寸五分ばかりでッ張つてるが、ぶつ拂ッちやどうだい、姐御草鞋錢でも呉んねえな。
○高野聖に宿かすな、娘とられて恥かいた。
○奴さんどこいきやる、私しは丹波のいな山へ、そんなら私も一しよーに、女の道づれ邪魔になる、氣強い奴さんだ、そんならこい。

○奴さん何所行きやる、芝居の幕引きに私も一緒に連れしやんせ、子供の連れは邪魔になる……。

○おらか旦那は牡丹餅すーきで、ゆうべ二十一、けさ又七つ、一トつあまッてたもとへいれて、馬に乗るとて牡丹餅落した、馬は跳ねるし、牡丹餅や取れず、牡丹餅〳〵、羽が生て飛んで來い。

○鹽や〳〵、かさい金町半田の稲荷、疱瘡も輕いな、痲疹も輕いな。

○藏前のそのさき黑田屋のお母さんは、黑いものがお好きで、黑羽二重黑繻子の帶締めて、黑い鼈甲の櫛を差し、目黑樣へ參るとて、黑犬にくろぶし食ひ付かれてまくらさんぼうに駈け出した。

○藏前で、おまはり捕ッつらめて道を聞く、ワッちや淺草に行くんだけんど、どッちッヤへ踏張るべい、おまはり指さし、これさ田吾作、確かりしろ、向ふに見ゆるが金龍山。

○猫じや〳〵とおしやますが、その猫が、下駄穿いて、杖ついて、絞りの浴衣で來るものか。オッチョコチョイノチョイ。

○四谷四谷とおしやますが、その四谷四谷で流行るは、大じま小じまに碁盤縞。

○辨慶が五條の橋に出向へば、向へほつそり柳ごオ、白き衣をば鎌にかけ、汝は誰ぢやと問うたれば、吾こそ源牛若丸、さてこそ曲者ござんなれ、薙刀小脇に搔い込んで、ちよいと突きやアちよいと飛ぶ、おちよちよのちよいと突きやおびよびよのびよいと飛ぶ、チョンガヨイヤサヨイヤヨイヤ。

○さつき傘六兵衛の薙刀、なべのすみかき、ちよきりなつきりな、狸の腹鼓チョ

チョンガヨイヤサ。

○奴何所行く紙鳶あげに、おれも一緒につれてつて呉んね、子供は邪魔だからいやだよ、奴いやな子、邪見な子、タンガラカッタ〳〵、オッパカパノパ。

○牡丹唐獅子竹に虎、虎を踏へて和藤内、内藤さんは下り藤、ふじみ西行後ろ向き、むきみは蛤ばかはしら、柱は二階と椽の下、下谷上野のやまかつら、桂文治は落語家で、でん〳〵太鼓に笙の笛、閻魔は盆とお正月、勝頼さんは武田菱、菱餅三月雛祭、祭萬燈山車屋臺、鯛に松魚に蛸鮪、倫敦異國の大港、登山するのはお富士山、三遍まはッて煙草にしよ、正直しやうたい伊勢のこと、琴や三味線笛太鼓、太閤様は關白ぢや、白蛇の出るのは柳島、縞の財布に五十兩、五郎十郎曾我兄弟、鏡臺針箱煙草盆、坊んヤはよい子だ寢んねしな、品川女郎衆は十匁、十

匁の鐵砲玉、玉屋の花火は大元祖、宗匠の居るのは芭蕉庵、あんかけ豆腐に夜鷹蕎麥、蕎麥屋のお金がどんちやんどんちやん、どんちやんかあちやん四文お呉れお暮が過んだらお正月、お正月の寶船、寶船には七福神、神功皇后武の内、内田屋見物七ッ梅、梅松櫻は菅原で、藁で束ねた投島田、島田金谷は大井川、かはいけりやこそ神田から通ふ、通ふ深草百夜の情け、酒と肴は六百だしやまゝよ、まゝよさんど笠横ちよにかぶり、かぶりたてにふる相模の女、女やもめに花が咲く咲いた櫻になぜ駒繋ぐ、駒が勇めば花が散る。

○チンワン猫にやあちう、金魚に放し龜、牛もう〳〵に狗犬に鈴がらりん、蛙が三つでみひよこ〳〵、鳩ぽつぽに建石石燈籠、小僧が轉けてる擂つく擂つく、布袋のどぶりに蟹夷、雁が三羽で鳥居におかめに槃若にひうどんちやん、どつこい

ワイワイ天王五重の塔、お馬が三匹ひん〳〵。

○河童と龜が賭事をして、勝々山を駈け上り、河童は途中で脚氣に罹り、葛根湯を飲んで居た、龜は構はずクック〳〵駈け上つて、賭物を皆な取つてしまつた。

○神田鍛冶町の、角の乾物屋の嗅がよこした勝栗買て嚙んだら固つて嚙めない。

○加賀の家中のかいむどんの内儀さん、片頬蚊が食ひ、痒さに掻いたら瘡になつてかせた。

○法性寺入道前關白大政大臣といつたれば腹をお立ちなすつたから今度ッから法性寺入道前關白大政大臣樣といはう法性寺入道前關白大政大臣樣。

○坊主が團扇に坊主を畫いた、隣の客は柿くふ客、扇に玉、生こめ生杉葉、向ふの小溝に鮪ちよとちよろり、長町の七曲り、やすい七曲り、向ふの竹がきに、竹

ぼうき立てかけてあまがつばひがつば。

○松の葉の樣な狹い氣を持つな、芭蕉の葉の樣な心もて。

○明り障子に梅屋と書いて、お客鶯來て泊る。

○さいてごんせよ長柄の傘を、沖の暗らいのは雨ぢやもの。

○私しも出しましよ藪から笹を、付けて下され短冊を。

○おまやお立かお名殘惜しや、雨の十日も降らせたい。

○姉がさすかよ妹がさすか、おなじ蛇の目の傘を。

○卸ろしなんせよ其前髮を、私に吳らんせそへ髮に。

○硯引き寄せ文かきつばた、明日の返事をきくの花。

○樣よ往かんかよお倉のせどへ、忍び櫻の枝折りに。

京都

●京の詞

○京の詞で、お出でヤす來ヤス、一服お吸ひヤす、お掛けヤす。

●天氣天象の唄

○雪花散り花空の蟲がわくわな扇腰にさしてきり〳〵と舞ひませう。
○雪ヤこん〳〵、霰ヤこん〳〵、お寺の松の樹に一ッぱい積りこん〳〵。

○雷落ちよ、桑の棒で叩くぞ。

●歳時唄

●注連縄貰ひ

○お注連縄クウだんせ、クリ〳〵だんせ、クウーだんせ。

●左義長

○爆竹や左義長、餅のかけーないかいな。

●初釜祭

○目出たー〳〵、今年もいそがしく、沸いて〳〵、沸きかいれ。

○御得意繁昌〳〵御用は富士より山なし釜はどん〳〵たきだし目出たい〳〵釜たき目出たい〳〵。

●紫野やすらひ祭

○安樂日花よ、やすらひさいた、あすない花よ、貸したる小袖を棘にかけな、やすらひ花は。

●十夜の暴れ

○伯父さん〳〵、今夜の土産はなんぢやいな、ほこ〳〵お薩に蛸の足、十夜の暴れに奪られなへ。

●盆踊唄

○盆の十六日はつか鼠を、おさへて、元服さして髪結うて、牡丹餅賣に遣りたれば、牡丹餅賣らずに晝寢して、猫に取られてニヤンコ〳〵。

○よいさつさ〳〵、此れから八町十八町、八町目のこうぐりは、こうぐりにくひこうぐりで、頭のてつぺんすりむいて、一貫膏藥二貫膏藥、それでなほらな一生の病ぢや。

○さあのやの糸櫻、盆には何もいそがしや、東のお茶屋の門口に、赤前垂に縮子の帶、チヨトよらんせはいらんせ、巾着に金のないのはおほしんきこうしんき。

●ヤトセ踊

○チヨイト、〳〵、踊れ〳〵、踊らしや、踊らにやそんぢや、ヤトセ、〳〵。

●投げ節

○霰ふるらし、とやまのかつら、色に見ゆるをいかにせん。
○渡りくらべて世の中見れば、阿波の鳴戸に浪もなし。

●手鞠唄

○一イ二ウ三イ四オ、四方の景色は春と詠めて、梅に鶯ほゝ法華經と囀づる、明日は祇園の二軒茶屋で、琴ヤ三味線囃してん〳〵手鞠唄、歌の中山ちやぐん、五十がちよ六、六六ちよ七、七七ちよ八、八八ちよ九が、九十でちよいと百衛いた

○一イ二の三吉、晝は馬追、夜は履打、お姫様方道中雙六、庭の景色を春と詠めて、梅に鶯、ほゝウほけきやと囀る。……。
○一イ二ウのなにはら杓子、割つたら吹く吹く團子小豆が煮へる、お月さん〳〵今年のおべゝは何々ござる、裏は桃色表は鹿の子〳〵づくして一寸百ついた。
○かい〳〵手鞠、かい見しより、見事に、かいたら、お慰み。

●

一、人こそ、師直の、あかさたは、あかさた遺恨の初りぞ、もろのうかいな。
二、ふたり編笠御無用と刀の手のうち御無用と、本藏かいな。
三、身の上知らずの九太夫は主人の逮夜に蛸肴、はさまうかいな。
四、よしない御用を引受て鹽冶判官御切腹、いたさうかいな。

五、ゐのしゝ打んと勘平は、覗ひ外して二ッ玉、はなそうかいな。
六、むこの爲めとて與市兵衛は、おかるを帶屋へ賣りに行く。
七、七阪祇園の一力で力彌はつば打つ目をさます。
八、約束ちがへて行るとなる、小波は力彌のいひなづけ。
九、九ッ階子を屋根にかけ、嫌がるおかるを無理上げにおろそうかいな。
十、取りてもにくても天川ヤ、儀兵衛の心は孝の道。
十一、一部よしうの四十餘士、そうよしこがれの短冊に、合はそうかいな。
十二、逃る御園のかわいさに、今夜の暗とて御城使に。
十三、さきだつはやの勘平は、長柄のいたづら殘念な。
十四、四十七人でんばんの、中でも寺岡平右衛門。

十五、御門ばかりのきびしさに、からほに石かけ八重櫻。
十六、ろうか玄關の一一に、雨戸の合せん合くるゝ。
十七、七尺四方の弓竹を、しけもかまゐも屋根〳〵と、はなそうかいな。
十八、八萬萬獄へ落つるとも、力彌をやるまいはなそまい。
十九、くちをしかるぞへもろのうは、鹽谷の雨戸の柴小屋へ、かごもうかいな。
二十、二十迄作ッた手鞠歌、忠臣藏のかたきうち、唱ふかいな。
○一ィ二ウ三ィ四よろづ吉原、榧や勝栗、ほんだはら、とうざ〳〵と三上山から谷底見れば、穩長や讓葉、讓り〳〵讓葉、大松、小松、海老、橙、筍、名古屋の城は高い城で、一壇上りよ二壇上りよ、三壇目にはよい〳〵よい子が三人御座る一でよいのは糸屋の娘、二でよいのは人形屋の娘、三でよいのは酒屋の娘、酒屋

の娘は容色がようて、京で一番、大阪で二番、嵯峨で三番、吉野で四番、御所で五番の姐さん見れば、立てば芍薬、坐れば牡丹、歩く姿は百合の花、百合の花。

●羽根突唄

○ひとめ、ふため、みやかし、よめご、いつやのむさし、なゝやのやつし、こゝのやとを。

●子守唄

○寢たか寢なんだか、枕に問へば、枕ものいふた、寢たといふた〳〵。
○寢たら丹波へ起きたら山へ、お目が覺めたらお江戸まで。

●蓮如上人の子守歌

京都市丸太町通堀河西へ入る順興寺といふ、眞宗の末寺に、此の子守歌保存しありと。

やしようめ〳〵。京の町のやしようめ。うつゝるものをみしようめ。坊門町にうる物。くさいかもちはしろくて。一くちなれどてうほう。在京人のめのどく。九條の町までもといふらとほるは。すや殿のことかや。みせへだいてちきうり。いたゞいてよみうり。山城國の國からもてでうる物。きうりほそね。しろうりなすび。ひしやくかもうり。あごたうり。からうりにひめうり。さこそ味のあるらめ。なうらう。にてうらう。大こんうらう。かはほねかぶらうらう。ふきうらう。おあへめせといふこゑ。しほなくぞきこゑた。とつころうらん。やまのいもにさ

といも。春の野にあるなかがみいづるさはてび。ゆきのひ町におせたるつくゝしらうよ。一もじすぎな。くゝだちあさつきもうらうよ。六角町にうるもの。うるもの。こひふな。たひとすゞきと。うぐひかれひ。なまづといせごひと。なよしと。にしやさゞゑ。ぼふのこ。あはびかつを。するめと。正月にいはふは。かきやたはらあいきやう。ひしやめはもちうり。さはらのこはきりうり。たこのてもやつ。いかのてもやつ。ほしだこもうらうよ。坊門町にうるもの。きんてう山鳥。やましぎ田しぎと。うづらとくゞひと。ひしくひ。がんとかもと。たかべと。あぢはすゞめてうなひ。しろことりもうらうよ。地獄の辻からかせがつじをみわたし。むろ町をとほれば。うらううるまいは上臈さまの御ことか。十八からはたちにあまて。廿四五の上らう。ぼう〳〵まひにうすげしやう。はさきとつて

かねぐろ。たちにたちてまします。我等がやうなるわつなし。わたもいらぬすすあう。ぜのひぼにきいて。こんの十徳うへにそつときそうて。すぎなりのかさをばふか〳〵ときそうて。ふけどふかねど尺八こしについさし。上臈さゑの御そばおよし〳〵ととほた。その時に御上臈たもとをじつととどめて。御とまりあれや殿とて。ゑくほはしぼにあまつた。料足の一文。かたわれもたねど。をとこのきりなれば。まづ御名をとうた。これなる御上臈のなをばなにと申候。はるのはじめにおもしろやはつはなと申候。これなる御上臈のなをばなにと申候。あたらし殿と申候。あたらし殿をさくより。いまいでと思うて。そとよてみたれば。御名はあたらし御かほはあるう居りやる。さもあれいかほどの御出ぞ。れいしきさぶらう。れいしきのこととは一すぢの御事か思ひをよらぬことなり。それさもさ

ぶらふは。ほうらくの御連歌〳〵とは五十文の御事か。思ひもよらぬ事がや。それさも候はずば伊勢への御まいり〳〵とはみわたりの御事か。おもひもよらぬ事なり。それさも候はずは大名の御かど〳〵とは五文の事かや。おもひもよらぬ事なり。それさも候はずば御寺さまの御かど。〳〵とは三文の事かや。時々のあきなひに。あれかるを忘らしめ。〳〵。

●遊戯唄

●京の大佛さん

○京の京の大佛さんは、天火で燒けてなア、三十三間堂が燒け殘ッた、アリヤドン〳〵〳〵、コリヤドン〳〵〳〵。

●桶の輪の底脱け

○桶の輪の底脱け、誰が底脱いた、桶屋の丁稚、まアどせ〳〵、元の通りにまどせ。

●凧が樹の枝其他高き所にからみるた時

○鍛冶屋の伯父さん、凧が止つたトッテンカン。

●鬼事こゞと

○鬼事こゞと、唐箕の上で、鞠つく音に、どんかん參つた。

●鬼事せんもの

○鬼事せんものは、つちや子持や、蔦の花よ、咲いたかすぼんだか、重々車に天より見れば、みどろくさどろく、ざつとのけになつたとせん。

●十文ぢや

○十文ぢや〳〵、お嫁さんの鵲籠は、十文ぢや〳〵、戻りは三文ぢや、深い川へはめよか、淺い川へはめよか、やつぱり深い川へドボン。

●あたまの皿

○あたまの皿は幾皿みさら、七さら八さら、九のさら十皿、とさんの上に灸を据ゑて、熱や悲しや金佛、毛の無い坊主、遊びに往て來い、轉けぬやうに往て來いすつてんころりと轉けました。

●動物の唄

群鴉大空をわたる夕暮

○お母アー去んヂャか、又明日お出でヤ、お母アー去んヂャか……。

○あとの鴉さきになれ、さきの鴉あとになれ。

○螢來い太郎吉來い、晝はお母さんの乳呑んで、晩にはバイ〳〵（提灯）高登り。

蜥蜴穴より出でくるを見て

○蜥蜴指嚙んだ〳〵。

●雜　謡

○四條の橋から灯が一つ見える、灯が一つ見えるアレハ圓山の灯か二軒茶屋の灯かいなエ、ソウジャエイー。（大石良雄作と云）

○川邊そだちと笑へば笑らへ、いつも私しや鮎がある。

○西と東とたて分けられて、あはにや分からぬ襖の繪囃子どつこいしよ〳〵。

○西と東と別れて居ても、同じ宗旨の朝まゐり　囃子なんまいだ〳〵。
○帶を買はうなら筑前博多、無地にせうか縞にせうか何にせう、　囃子獨鈷にせう〳〵。
○櫻山茲俊が義旗を擧げたる櫻山、花の香に消ゆるとも、幾代久しき名は殘る。
○小松中將重盛が、忠と孝とに身を寄せて、神に祈りて死を得しは、心まことにあはれなり。
○伏見三八の兵隊さんは、將校が拔劍號令かけ、右向け左向け前へ進め、彈丸籠め狙うて喇叭吹く、テレテッ〳〵〳〵。

●西陣織

○忍べ艱難こらへよ辛苦、奉公大事に餘念なく。草履つかみし下郎でさへも、末は天下になり瓢。
○末は錦を織子のつとめ、細い手業もいとやせぬ。
○紙で繕ふか金巾でぬはうか、勘忍袋は布がよい。
○うまずたゆまず織さへすれば、細い糸でも綾錦。

大阪

●手鞠唄

○一筆參らせ文の露、みか返事か夏蟲か、サ、夏蟲か。
○二た親置て驅落に、驅落するとは道慾な、サ、道慾な。
○見る〳〵お常さんよい女房、新さん側でにこ〳〵と、サ、にこ〳〵と。
○嫁にもたれて膝枕、新さん今晩冷えまする、サ、冷えまする
○いつ〳〵見ても新さんえ、鏡臺の引出し又あける、サ、又あける。
○無理にしめたる腹帶を、緩めて下さい新さんエ、サ、新さんえ。
○泣く〳〵お常さんのよいのうも、新さん惚れるは尤や、サ、尤や。

○山行きしようとて行厨して、お菊さんの振袖氣にかゝる、サ、氣にかゝる。
○買ふて貰ふて緋鹿子、かけて歡ぶお菊さん、サ、お菊さん。
○德利さげて酒買ひに、これも新さんの機嫌酒、サ、機嫌酒。
○一チ一チ私しが惡るかッた、勘忍なされや新さんエ、サ、新さんエ。
○二階からのぞくはお菊さん、新さん下からいそ〳〵と、サ、いそ〳〵と。
○十三參りの留守のまに、お菊さんこかして乘りかゝる、サ、乘りかゝる。
○シン〳〵島田に髮結て、銀のおきなが山結び、サ、山結び。
○五人男子を並べても、中でよいのは新さんや、サ、新さんや。
○ろく〳〵お首がニウト出た、中場で障子をしめとをす、サ、しめとをす。
○質に置たる繻子の帶、受けて下され新さんエ、サ、新さんエ。

○八萬地獄に今落ちる、助けて下され新さんエ、サ、新さんエ。
○車にひかれたお菊さん、新さん泣く〳〵醫者よびに、サ、醫者よびに。
○はたもチャン〳〵好く織れるまだおれぬ、サ、まだ織れぬ。
○今日二十一弘法さん、お菊お手引て參らうか、サ、參らうか。
○苦い藥を服むよりも、新さんのお手から粉藥を、サ、粉藥を。
○櫻の木に縛られた、ほどいて下され新さんエ、サ、新さんエ。
一ッえ—人も見殺す師直は、顏世戀慕の其胸に、あらそうかいな。
二ッえ—深い編笠尺八で、其手の手の中御無用と、本藏かいな。
三ッえ—身の上知らずの九太夫が、主人のたいやに蛸肴、はそまうかいナ
三ッえ—醉たお客は由良の助、お輕は二階で延べ鏡、映つそうかいナ。

五ッえ—猪討んと勘平は、狙ひ過して二ッ玉、アー二ッ玉。
六ッえ—胸に餘りし判官は、白木の三寶に九寸五分、腹切ろかいナ。
七ッえ—泣き〳〵お輕は駕に乘る、跡に殘るは勘平が、腹切ろかいナ。
八ッえ—山越えて里越えて、力彌さんのおやしきやもう其所ぢや、オホ恥かしや。
九ッえ—九ッ梯子を屋根に掛け、嫌がるお輕を無理やりに、おろさうかいナ。
十ウえ—とうと敵が討てました、明日は主人の墓參り、まゐらうかいな。

●

一ッえ—人も通らぬ山中を、おりうさんと吉さん手を引て、このじよかいな。
二ッえ—二股大根は離れても、おりうさん吉さん離りやせぬ、このじよかいな。
三ッえ—見る〳〵おりうさんは好い嫖致じや、吉さん惚れるも尤や、このぢよか

いナ。

四ッえ—用もない門二度三度、おりうさんに逢とて又一度、このじよかいナ。

五ッえ—何日も流行らぬ簪を、おりうさんにさゝして品を見る、このじよかいな。

六ッえ—むくげの花は一度咲く、おりうさんのお花は二度三度、このじよかいナ

七ッえ—何を言ふにも語るにも、おりうさんのお腹に赤兒が居る、このじよかいナ。

八ッえ—燒けた屋敷へ小屋建てゝ、おりうさんと吉さん世帶する、このじよかいナ。

九ッえ—此所で死だら何所で逢ふ、地獄極樂眞中で、このじよかいナ。

十ヲえ—とん〳〵叩くは何人ぢやいな、吉さんの事なら明けてやろ、このじよかいナ。

いナ。

十一え—一々私しが惡る御座る、勘忍して呉れ吉三さん、このじよかいナ。

十二え—十二藥師の裏門で、おりうさん羽根突く手鞠つく、吉さん弓やる鐵砲う つ、このじよかいナ。

十三え—參宮まゐりの留守事に、おりうさんこかして馬乘りに、このじよかいナ

十四え—しん〳〵島田に髪結ふて、赤い丈長かけおろし、このじよかいナ。

十五え—五人男をならべても、中で好いのは吉さんや、このじよかいナ。

十六え—ろく〳〵お首が飛でさて、おりうさん吃驚して目を廻す、吉さん泣きな き醫者呼びに、このじよかいナ。

十七え—質に置たる簪を、受けてくンない吉三さん、このじよかいナ。

十八え—八萬地獄へ今落る、勘忍して呉れ吉三さん、このじよかいナ。
十九え—熊野のお寺へ參ろとて、賽錢忘れて、恥かしや、このじよかいナ。
二十ゑ—苦い藥は飲むだけど、甘い藥はまだ飲まぬ、このじよかいナ。
○一イ二ウ三イ四ヲ四面の景色を、春に眺めて、梅に鶯、ホホ、法華經と囀る、梅と金とは、匂ひはん〳〵、明日は北野の、二軒茶屋で、琴や三味線はやしてんて手鞠唄、歌の中山、ちよろくろく〳〵、ちよひちひち〳〵、ちよくで一貫突ました。
○きよん〳〵京橋々詰の、紅屋のお勝さんの染物は、立てもすはつてもよう染るあんと車に水が無いとてお江戸行く、お江戸の長崎腰かけて、もし〳〵小供しさん、此所はなんといふ所、此所は信濃の善光寺、善光寺様へ願掛けて、梅と櫻を

あげまして梅はすいとて戻された、櫻は好いとて譽られた、丁度一貫突きました
○一イ二ウ三イ四オ五ツ六ウ七八ア九ノ十ヲ、豆腐屋のお内儀さん、三ツ子を生んで、一人の子を漆屋へやつて、漆にまかれてふぎや〳〵〳〵と、もう一人の子を紙屋へやつて、紙半帖貰らつて、イロハと書いて、とんとにあげて、左義長の途で、喧嘩が出來て、わけ〳〵わけよ、翌日の朝見たら、手の無い子と足の無い子と、横槌かたげて、えつさつさつさ。
○一イ二ウ三イ四ウ鎧の人形顔赤い、赤鯽の吸ひもん蛸の足、おあし難波の南ぜん寺、なんでそないにおしやんす、おしやんす長持狹ン箱、重箱、お供に奉る、たいまつしやうしん賑やかな、にんにやかだらすけ癪によし、よしのゝお山は皆天狗、てんぐちら〳〵ちつとらや、虎屋の羊羹豆朽子、しやくし如來の釋迦のて

ん、しやかの天から窓覗く、桃栗三年柿八年、柚が九年で生りかゝる、梅はすゐとて十三年、のみの正月蚊の五月、是で一かんつきました。

○一二三四お宮の山から風吹く鐵砲八ばう針山林ほんけの千鳥朝顔の花が咲くかさかんか今咲き候、同じめくら杖つゐて通る、こゝ一寸どいてんかどくことなりません、通る事なりません、おかるとおかめが魚つりに、大けな魚釣て子にくはして、嫁貰ろて、嫁は十三子は七つ、是で一かんつきました。

○一二三四お宮の姉さん助一さんの助の土産に何々もろた、一で香箱二で白粉箱三でさし櫛、四の目の枕、中で一番すそ模様で、梅にうぐひす、そうり橋、そうり橋から水が出て、誰れが知らした、茶屋のおんばが知らした、伊勢の土産に米百石、すつとん〳〵、是で一かんつきました。

260790

●子守唄

○ねんねころいち、天満の市は、大根揃へて舟に積む、舟に積んだら何處行きやる、木津や難波の橋の下、橋の下には鴎が居よる、かもめとりたや網ほしや、わみがゆら〳〵由良の助。

○守と云ふ者は樂そで愁ひ、お主に叱られ子にせつかれて、他人にや樂そに思はれて。

○ねんねころいち天満の市よ、大根揃へて舟に積む、舟に積んだら何處まで行きやる、木津や難波の橋の下、橋の下にはお龜が居やる、お龜とりたや竹ほしや、竹が欲しけりや竹屋へ行きやれ、竹はなんでもござります。

○ねんねころいち、ねる子は可愛、おやだすけ、起きて泣く子は面憎い。
○ねんねこまんねこ酒屋の子、酒屋を嫌なら嫁にやろ、嫁の道具は何々ぞ、簞笥長持櫃戸棚、琉球包が六荷あり、風呂敷包は數知れず、それ程拵へ遣るからにや一生去られて戻るなよ、そりや又阿母さんどうよくな、千石積んだる船さへも、風が變はれば戻るもの。

●勞作唄

●木遣唄

○ヨイ〳〵ヨイコラナヨ〳〵ショナラ、佛の行よ、行者がにんべん大菩薩よ、菩薩よとめます彼方や此方に、此方にねるうちやよみがき、樂しみ〳〵なくてはて

の家の務め、つとめすりやこそ可愛子にまかれ、親は孤着て門に立つよ、門にたちばな障子にもたれ、門の樣子をきくの花よ、私しや片手に萎れ花、ヨイ〳〵ヨイコラナヨ。

●女工唄

○色の黑いのに白粉つけて、當世はやりの銀ねずみ。
○色の黑いのに白粉つけて、おかん見てくれつるし柿。
○色氣づいたか龍田の紅葉、日日毎日水かゞみ。
○他人の男とだい膽女、山の大木氣がふとい。
○男とるのは女のかいしよ。なんで其時氣をつけなんだ。

○思ふた男とそはしてお呉れ、ワシが此世は五十年。
○親も大概あれならそへと、いふが親子の苦勞人。
○つれて出たかてかいしよがなけりや、猫にかん袋であとゝもどり。
○今夜よひの宵からおいで、東枕の窓の下。
○金が無くなる未練は殘る、女の親切うすくなる。
○お釋迦さんさへ賭博に負けて、四月八日にヤまるはだか。
○承知ない娘に承知をさせて、無理に咲かすは室の梅。
○信州しなのゝ新蕎麥よりも、私ヤあなたのそばがよい。
○添ふて苦勞は世間のならひ、そはぬ先きから苦勞する。
○花の盛りにしんとめられて、いつが春やらさかりやら。

○犬の長吠夜はしんかんと、殿に災難なけりヤよい。
○そうてみやんせ金こそなけれ、かいしよなしとはいはしやせぬ。

●天氣天象の唄

○お月さんいくつ、十三一ッ、今度京へのぼつて、守のぜゞでおまんを買ふて、其おまんどうした。油買ひにすかひに油屋の門で、油一升こぼして、其油どうした、白との犬と黒との犬と、ねざりよつて候、其犬どうした、皮とつて太鼓に張り候、其太鼓どうした、あんまりたゝいたら破れたよつて、向ふの山へぽいとはつてしもた。
○お月さま幾つ、十三七ッ、そりやまだ若いな、こんど京へのぼつて、守の錢で

お饅頭を買ふて、△ちやんと△ちやんにみな進げた。

●歳時唄

●注連縄貰ひ

○おしめ縄お呉れんか、一束か二ワか三束か四ワか客いかゝほりだせ。

●蠟燭貰ひ

節分の晩、兒童等、鐵葉の空鑵を敲きつゝ

○おんごろ餅は家に來い、ドンドコドンのお見舞ひぢや(與へざる時は)こゝの家は客嗇坊

●遊戯唄

●お嬢さんのお供

○お嬢さんのお供で、お氣がはる、お氣もはるなら。乳もはる。

●茅花けん

○茅花けん、まめ茅花、今年の茅花は、ようでけた、活けて置くより摘んだ方が增ぢや、耳に卷いて、すつぽんぽん。

●淀の川瀬の水車

○淀の川瀬の水車、チヨイ〳〵、昨夜吹いた風は、大津へ聞えて、大津のお馬、お馬槍持ち、よう槍持つて、今夜抱いて寢て、味噌摺つて舐らう、それが可嫌なら一文で飴しよ、二文で女郎、女郎は可嫌ぢや、畳屋のお仙さん、お仙さんに子が無い、子が無きや儘よ、いとびいびいかへりましよ。

●通れ〳〵山伏

○通れ〳〵山伏、お通りなされ山伏。

●芋蟲ごうろごろ

○芋蟲ごうろごろ、後の長吉ちよいと來い。

●子買

○子買オ〳〵、どの子が欲しい、いつちの中の(誰々)が欲しい、いんで何食はす蒲鉾三切れ、咽喉へ骨が立つ、毛抜で抜いて遣る、痛い、お饅頭の皮で撫つて遣る、こそばい、二階で手習、落る、下で手習、墨が着く、椽の下で藁打たさう、豆がでる。

●動物の唄

○山本勘助何とかく繪かく字かく蚯蚓かく。

○猿が木イ口口引掛けて、鍛冶屋のおッさん取てんかん、取ッてんかん〳〵。

○蛙飛でも休みが永いぞ。

燕の轉るを見て

○土喰つて泥喰つて口澁い。

●雑謡

●島のおたけり

○島のおたけり、どろ〳〵なるぞ、村衆はお逃げ山濤が來る。

●千里の籔

○とらは千里の籔をさへ越すに、障子一重が儘ならぬ。

●エサ、ー節

○櫻エー櫻、さゝん花、難波のさつきか、今宮か、萩ぎよさん（方言なり多きこと）に、あやめかきつばた、女郎花、香が好きなら、蓮華の花さかしやれ、牡丹、紅梅……。

●あてゝんか

○あてゝといふたら當てゝんか口口ぼと〳〵あてゝんか。

●蝶々のかんざし

○蝶々のかんざし買ふてもろて口口の大きうなるのを知らなんだ。

●唐人風の菓子賣

○奈良の興福寺の三笠山、二月堂やら若狭のより水昔は都で、名所があるワいな

○唐人のねごとは、あんなんこんなん……。

○こりや〳〵來たワいな、これ九州長崎の丸山名物ヂャガラ糖お子様方のお目覺し、お爺さんャお婆さんにあげられて、第一壽命が長くなる、お若いお方にあげられて、いろのとれるがきんみやうじや、おや〳〵、どうしよ、ヂャどうしよ、うまい甘いのチャガラ糖パーパー。

●玉造稲荷正遷宮

○一に大阪玉造、二に稲荷の砂持てば、三にさら籠さし荷い四つよいから夜中まで、五ッいつからいつまでも、六つ娘をかざり立て、七ッ鍋釜うり拂ひ、八ッやまほどちようちんを、九つ此町のかざり物。十を所の氏神は。

●安樂坊

○ひるは日傘で日が暮れて、提灯ぶら〳〵まゐりましよ。

○かひるひよこ〳〵身ひよこ〳〵、蛇のらくら、なめくぢらでまゐりましよ。

○番頭およしに身をいれて口口ぶら〳〵まゐりましよ。

○安樂々樂世がなほる、島の番頭で二十四こゝでいつぱいのんだらとてつるつん。

○酒は劍びし劍山いつぱいのんだらとてつるつん。

○材木屋の番頭であはてた番頭はしらで頭をとてつるつん。

●雷おこし

○雷おこしが來たワイな、きたといふたらみなみから、かみなりおこしが來たワいな、しつかりしよで、ごろ〳〵うちばんよこずちとんかたかんのかん。

●唐米

○支那の米をたいてたべて、たべて見たらおなかがぶつ〳〵白坂ほい。

●おんごく

○さあて〳〵さて横堀のうどんやの子が心中したと、もうし母様男は誰や、こちの隣の米屋の手代、物もよく書く算用も能する、きよな男で御座り升さ。

○忘れたがなは何々を忘れた紅葉笠忘れた空が曇れば思ひ出すさ。

○舟が出て行くほかけて走る、茶屋の亭主が出て招くさ。
○玉江橋から天王寺が見える、それがふしぎな玉江橋さ。
○なにかやさしや螢の虫は、草の葉陰で火をともすさ。
○城の馬場の口八狸ぶら〳〵うろ〳〵とさ。

●薩長の勢力

○時が來たればおさつ（薩藩）が腐敗る、そこでおはぎ（長藩）に徴がさす。

●竹田の芝居

○大阪道頓堀竹田の芝居、錢が低廉くて面白い。

●會津の不人氣

○あいつ（會津藩）いなして、さきのかゝ（金澤藩）よんで、もとの長州で、くらしたい。

●備前やしき

○内藏さんへ（備前位は内藏頭）綿木やお前にひきぬかれ、だてにほされてゐるわいな。

●千兩箱

○千兩箱、富士の山ほどあつてもいらぬ、冥土の土産にならゃしよまい。

●花と紅葉

○水間橋に牛瀧もみぢ、吉野櫻に野田の藤。

●瓜賣が

○瓜賣が、瓜賣に來て、瓜賣れば、振賣る瓜を、かぶる瓜賣。

●大阪心齋橋

○大阪心齋橋鮨屋の娘、鮨を賣りつゝ子が孕きる。

●きんらゐ〳節

○きびすがん〳、ゐがゐどんす、きんぎよくれんぼのかくれんぼ、すつちやんまん〳かんまんかいの、おつぺらぼうのきんらゐ〳。

●げんこつ

○田舎の姉さん、おねまでしつぽり、お樂しみ、げんこつ、あいたゝ、しんぼせあほらしいやおまへんか、出たり消たり、消たり出たりの辻占。

●向ふに見ゆるは

○向ふ一に、チテチン、向ふに見ゆるは、あれは何んぢやいな、朝日の御旗を飜へし、たしイーか、東郷さんの艦隊、トントツテツテ、トチ〳テン〳。

○向ふ一にチテチン、向ふに見ゆるは、あれは何ぢやいな、砂の煙を蹴り立てゝ、

たしイーか、騎兵の進軍、トンテツテツテ、トチトチテン〳。

●トツテレトン

○かねエ、トツテレトツテレトン、ドン〳バツバと使うて、粹になることなアらア、唐も日本も、江戸も大阪も、みな粹な、ツンテントン、だアまアされた、つウまアまれた、知つてる〳知つてる、こんでる〳。

●住吉の隅に雀が

○住吉の隅に雀が巣を込んで、白鷺御あいさつ、私は使ひに行かねばならぬ、鰌土産に、進ぜましよ、ヨーイ、鶴どん、テントンチヤン。

●まねしまんない

○まねしまんない米もらひ、一日あるいて五合もろた。

畿内
山城國

●茶摘唄（宇治）

○宇治は茶處、茶は縁所、娘ヤリたヤ婿ほしや。
○一の谷越え二の谷越えて、田原行けとは、いヤの谷。
○御茶がありやこそ田原は都、お茶がなければ、いヤの谷。
○お茶の一番仕は手首が痛い、早く二番仕になりなされ。
○私が儘なら茶摘みはさゝぬ、涼し二階で晝寢さす。
○焙爐夫さす樣な開化けた親が、何故に乞食をさゝなんだ。

○宇治は善い所、北西晴れて、東山風そよ〳〵と。
○宇治でもうけて田原で費ふて、花の朝宮で丸裸。
○加茂や笠置は山家で御座る、何故に山家に船がつく。
○古葉粉にして迷ひ葉をよせて、而て貫ありや御茶師樣。
○御茶師番頭さん盲ならよいが、御茶の吟味が無て良い。
○御茶は揉め〳〵揉まねば寄らぬ、揉めば古葉も粉茶となる。
○あわて過して露もみこんで、末で團子は何うなさる。

●草取唄（愛宕郡）

○草を取るなら寄りそひ稗を秋に穂が出て、あらそへる。
○盆にや踊ろう、正月にや寢よう、長の夏中に草取らう。

●臼挽唄（同上）

○臼よ廻れよ、きりゝとしやんと、夜さり挽さゝしよない。
○私とお前は石臼夫婦、入れて廻せば粉が出來る、臼が挽きとて來たのではないが、こゝの娘に逢ひに來た。

●米搗唄（同上）

○なんぼ踏んでも此米は踏めん、これも百姓の涙米。
○獨り米搗くあの水車、ひぬかこぬかを待つわいな。

●祝唄（同上）

○此所の座敷は目出度い座敷、上から鶴が舞ひ下がる、下から龜が舞ひ上がる、鶴と龜とは舞を舞ふ、こんな目出度い事はない。

●盆踊唄（同上）

○盆の十六日はお精靈の施餓鬼、蟬が御經讀む木の空に。

●盆踊唄（愛宕郡上賀茂村）

○春は花、秋は月にぞ憧がるゝ、四季折々の樂しみは、是れ人間の榮華なり、光源氏の古に、更衣あまたの戯に、春と秋とを取々の、物爭ひを熟々と、思へば昔忍ばるゝ、春去り夏も早闌けて、うら珍らしき秋風の、そよとばかりの音信も、日毎にうとく年毎に、增さる思は天の川、空に懸けたる紅葉橋、渡りかねたる我が中は、何かさはりか怨めしや、獨りつくゝ夕暮の、空をまねけば初雁の、誰が玉章やかけつらむ、若しも我手に取るならば、ほんに嘆きは嵐山、其名も高雄小倉山、紅葉の錦夜々に、己が妻とふ小男鹿の、聲も寂びしき長き夜を、寢られ

ぬまゝに戀ひ明かし、袖の涙に影宿す、有明月の映し入りし、寢やのつま戸を開けたれば、小笹が上の露霜を、時雨につくる蔦葛、はゝその紅葉はま紅葉、八潮や小原の賤の女が、薪にそへし紅葉の、夫も情はあるものを、ほんに情なきつれもなき、人ゆゑ身をば嘆きても、逢瀬を祈る貴船川、麻と手向くる紅葉の、錦の袂來ても見よ、鞍馬の山のうつ櫻、また如月の花よりも、增一しほの落葉の錦、林間に酒暖めて唐うたをうたひ、遊び忍ぶ人々よ、心の風情面白や、巖の上に苔蒸して、袖も袂も九重の、紅葉重ねの紅に、大和錦や唐錦、織りて品々山姫の、心づかひぞたぐひなき、巧みに織りし山の端の、紅葉のはなも神無月、時雨の雨に散り亂れ、唐紅の龍田川、わけても見たや紅葉の、波の鼓の音高く、青海波をぞ舞ひ給ふ、その風流の錦の袖、あゝ面白や幾度か、さしかざしつゝ紅葉を、千代萬代と君が代を、誰も來て見よかしのへ。

●遊戯唄

（紀伊郡島羽地方）

○子買ふ〳〵、子に何喰はす、ト、（魚又肴）に饅頭茶づけに香の物、それも宜かろが給金何程、百十五文、彼方も此方も商人で、何の子を上げまひョ誰さん……お呉れ。

○下駄かくし、九年ぼォ九年十年、お顔の底拔け、鬼になつたとて、お腹を立てヤーアるな。

○かゞ〳〵十六文、此所から江戸まで三文目、江戸でもんぢりかへつて（結ぼれたる事）大阪で切れて、お尻がヒョッコリ出まして、何程出ました、瓢簞の底にアッ、（灸）を据ゑて、熱や悲しや金ぼうとけ、金佛、深い川へ陷めよか、淺い川へ陷めよか、同じ陷めるなら血の池へ、だぶりこ。

○金樹山の桃喰オ、桃まだ青い、青いのが好きや、牡丹芍藥百合の花。

○入れこ、指しこ、指したものに豆喰はそ。

大和國

●大和春日神社の田植祭

○若たね植そよ苗たね植そよ、女の手に手を取りて拾ひ採とよヤレ〳〵ヤレ〳〵。
○みましもけや若苗とるてや、白玉とる手こそ白玉なゆらやとみくさの花ヤレヤレヤレ〳〵。
○福萬石に本石へ、うゑちらして、手に手を取つて拾ひ取るとヤレ〳〵。

●正月唄

○正月さーたら、何うれ、お月さん見たいな餅たべて、割木見たいな魚そへて、

お雪みたよな飯たべて、こたつへあたつて、寢んねこしよ、ねんねこしよ。
○正月どん、何所まで、みろく山の、奥まで、おかいろ、おかいろ、おかいろの道に、がんごどんが、出とつて、せんち隱れて、びつち糞で、すべつて、かつた糞で鼻ついて、ああ臭やつん。

●餅搗唄

○芽出たく〳〵で、若松樣や、ヨイソラ枝も榮えりや末繁昌面白や、ヒヨノウノ、ヒヨウタンヨイ。
○うちの裏やに茗荷と蕗と、ヨイソラ茗荷めでたや、ふき繁昌、ヒヨノウノ、ヒヨウタンヨイ。

●糸引唄

○戀し〳〵と鳴く蟬よりも、鳴かぬ螢は身を焦がす。

○こいで〳〵と、待つ夜は來いで、なつのよがきて、かどなたつ。

●盆踊唄

○盆の十四日に踊らぬものはヨイヨイ猫か鼠か、空飛ぶ鳥の、ヤッサノセエ、ヨヤサノセ。

○まるこなれ〳〵、まんまるこなれヨイ〳〵、十五の月のヤーレ、まんまるくなれ、ヤッサノセエ、ヨヤサノセエ。

●子守唄

○ねんねころいち、てんまのいちや、大根そろへて、舟に積む。

●手毬唄

○一ィ二三ィ四五六に七八、おこ〳〵お開帳、お花の都ヤ、おとすな〳〵、おちョうびやく、ちやう百、ちョと一貫つきました。

●羽根つき唄

○一め、ふため、みァかし、よめご、いつやの、むさし、なゝやのやくし、こゝのやくし、こゝのやねへ、とまつた。

○ひとりきな、ふたりきな、みんなきな、よつてきな、いつも來ながら、むつかしい、なゝこの帶を、やの字にむすんで、こゝのやで、とまつた。

河内國

●盆踊唄

左の歌及節は河内音頭即ち盆踊の歌なり、皆段ものにて白石噺いざり仇打等とす。

○は上の句△は下の句亦○の處でヨレヨホホイホイと附て其時踊子はヤットコセドッコイセー、とはやす、又△印の時踊子はヤットコサー、サイヤドッコイセー、とはやすなり、其他總て囃子の時色々としやれ語を用ふるなり、囃子には總べて大鼓鐘等を用ふ。

●河内音頭志賀彈七の敵打下の卷

扨は一座の何れの君樣も、辯じ述ます、これなる段の義はサ志賀彈七のなるお咄

しを△兩女が武術の稽古いたさる、末になりましたることならばサ、かのこがはらといふところで、いよ〳〵敵打のお咄しにかゝる、ことの善惡わかるまでサ、おんひそやかに賴みませう△姉の宮城野妹の信夫○二女が玄關先にて頭をさげてサあなたにしがんがござイ升△御願申は餘の義にあらず、こゝへ一人來てたべサ少しの遺恨が元になり△だん〳〵詫すれども聽かずに彈七殿は○殺されました此の無念晴らしサ父上樣やめん〳〵どもが△敵打たいけんどを敎へてたも○しがんを致して正雪樣のサお側へ出したる此卷物は△楠正行樣の御卷物で御座る○正雪樣は手に取り上げ、頂戴いてサ能ものが手に入つたと○よろこべど△それはよけれど姉妹二人の姉は長刀妹は鎖鎌サひにち毎日えいヤヤッとの稽古を致す、熊谷どのに伺ふて一心籠めての稽古を致す○月日のたつのは矢玉の行く如くサ一ケ

年やら二ケ年もたつならば△三年五月五日のことに相成ると○そこで正雪様が手のうちながめてサ我々稽古が達したと△それなら敵が打てるに相違がないと○これから敵打願書認めてサ

「三代將軍家光公へと願上げ△其時ようたつ役人誰方、聞けば○酒井雅樂頭様と松平三河様と△また外に用立役人數々候と○そこへ願書を押開いて讀むならば皆取々に御評議なさる△評議中ばへ大久保彦左衛門様が女の敵うちとはは て妙ぢや打たすがよからうと御評議があがる△これを六の上様へふこくがありければ○御との様から國づけの御たつしが廻ると聞え庄屋や年寄いそがれる△そこで御役人のもうすることにや○我々召寄せたは餘の儀であらずサ女一名に竹が一本かのこをそへて△二人居るなら竹が二本にかのこ二筋持つて○三人居るなら竹が三

本にかのこ三筋ぢやサ四人居るなら竹が四本にかのこ四筋ぢや△ひとこになわを二百文で持つて行けと○云つけられては庄やかとこゑよりね、はい〳〵必得ましたと此事ほか〳〵へ申付けたなら△聞より百姓の娘が、我も己れもと皆集りて○皆云通り女が三人寄つたなら、かしましや〳〵、六人寄つたなら姦まし〳〵口やかましワい△さきの燕がうはまへ取りに來るかと思ふと、チャ〳〵くちャ〳〵饒舌る○お松さんが小松さんに云ふことにや、三年後に衛門作殿が殺されさしやた△その敵を姉妹二女が打やしやるそうな○わたしらも朋友ならば助大刀いこかと云ふて皆誘ひやう。

●雜謠（若江郡近在）

○天窓茶瓶でも藥鑛の湯でも妾しや吉野の花と見る。
○花の三月木の芽もつはる妾も主ありやつはるもの。
○わしは御所柳位が高い、落ちて大事の身で御座る。
○何をなげくぞ河端柳水の流れを見てくらす。
○わしが思はあの北山の落る木の葉の數よりも。
○高砂や四海波と謠はぬ先に、こちの人とは呼び難い。
○お前あるゆゑ世間の人にいらぬ氣兼をするわいな。
○紺の前垂松葉のちらし松にこんとはなさけない。

○花はせんさきなる實は一つ九百九十九迄あだ花や。
○たしよでつま持ちや麥藁襷、掛てたよりのないものや。
○橋のゝらんかんに袖振かけて月の明りに文を見る。
○勤めする妓にまことがあれば、建てた柱に花が咲く。
○いやな男が千度來ても、おひまづやしの草履破り。
○あの子淡ヤ兩手に花を、わしは片手に萎れ花。
○わしも若い時や千行の花よ、今は野原の萎れ花。
○せんの殿より今度の殿は若ふてをさのて猶可愛。
○可愛々々が實まことなら、外で浮氣をなさりやしよまい。
○正月からあひに來たのに戸は七五三の内、門で青々松ばかり。

○門でたち花戸にもたれ花、うちの樣子を菊の花。
○さんよ知らいで米やが出來よか四六二十四で二升四合や。
○松のちんちら我身は知らぬ、高い空から身を投る。
○だいてねてさへ隙間の風が、まして木格子の內と外。
○夏は木の空冬けにや炬燵、離れともない主の傍。
○高い山には霞がかゝる、若い女にや目がかゝる。
○きりよ美い娘と新し舟は、誰も見たがる乘りたがる。
○勸めつらさに出て山見れば、もやのかゝらぬ山は無い。
○わしとお前は白菊の花、おうち知れたらなぎの花。
○年は往かねど信貞な女、ゆかにや見にくるあひに來る。

○おもふた男は大阪の土地で、舟のせん人をなさるそな。
○高い山から牧方見れば、やせた娼妓がしらめとる。

和泉國

●住吉踊

○アラ面白の神踊り、天長く地久しく、天下泰平國家安全民榮え、治まる御代のためしとて、兼てぞ植ゑし住江の、岸の姫松目出度さよ。
○神をいさめて高天原の、ヤアサ、四社の前なる、アレ反橋、前は松原、ヤレ高燈籠、ソレ住吉樣の岸の姫松目出度さよ。

●浪華屋の松

○堺住吉なにはやの松、松はよくても餅は高い、もうし御客さん、松見て餅たべて、お茶のんで、烟草の火をあげて、一錢でそれで國々名が高い。

●田植唄（横山地方）

○此月は五月六月、又くる月は七月、七月の盆は來るのに、萬燈籠點もす子はない。

○友達に殿御取られて、御腹がたゝぬか御かたよ、立つでもなく立たぬでもなく

あの山の青木小柴の燃え立つ樣に思へど。

○我子にはにごりたかもり、嫁には鯛の中骨、中骨もくわにや名が立つ、くやれ鯛の中骨。

○伊勢へ參ろや熊野へまゐろ、奈良初瀬かけて清水、清水で七日籠りて、今出る

●子守唄（堺）

○大根揃へて舟に積む、さゞやなんばの橋の下、ねんねこ寢たら子も樂守も樂。

●手鞠唄（同上）

○受取つた〳〵、三五の盃受取つた、これからどなたへ渡しませう、白壁盡しの、こうし盡しのお姫さんへ渡しませう。

●大寺餅（堺）

○大寺餅、〳〵、左官屋の寢言で、コテホシ〳〵、爺のナン餅、嬶の燒餅、ドッコイ倒れて尻餅、うまい大寺餅、黄粉餅、餡餅でシンコ、コテホシ〳〵、立て喰つてもうまい、座つて喰ても、寢て喰てもうまい。

攝津國

●住吉御田植式の田舞（東成郡）

聲のよい聲、よい聲の一人節より只から聲のつれ節。
○十七は濱へおりて、黄金の柄杓で水を汲む、水汲めば袂は濡れるぞ、たすきを掛けやいの、十七の掛けた襷は、深紅から絲の八房。
○梅なれば夏の青梅、殿御となれば若いの、若ければまだもできよもの、やせ子は寢間の妨げ、妨げとは申すけれども、子は末代の寶。
○我子には五尺菅笠、嫁には裏の味噌蓋、味噌蓋でもきねば名が立つ、きやれ裏な味噌蓋。

○あの山から時雨してくる、傘千も二千も、皆女郎達に着せかきよ。
○汝もしけや、若苗取手はや、白玉取る手こそ、白玉なゆら〳〵や、をれよ彼奴鳴いてぞ、我れはら田に立つよ、我れは田に立よ、春の田をたへすきかへせば、苗代水に浪の花立つ、ヤヨ、アリヤ、ソーヤ、ソーヤ、リアリヤソー。
○この朝げ青雲いでぬ、五月雨晴れぬ。苗植子供（ヤヨアリヤの囃を繰返す）
○秋の田を苅り分けゆけば稻葉の露に裾ぬれ〳〵ぬ（囃子前に同じ）
○冬の田をいなくきかへせ氷らぬ先に麥まけ子供（囃子同じ）

●臼挽唄（伊丹）

○摩耶に登りて兵庫を見れば、心兵庫で身は摩耶だ。
○池田川では、上れ皮を晒らす、下れ江戸〳〵酒造る。

●愉快節（神戸）

○神戸好い所ぢや開けた港、ゑいぢやないか、數多の異人さんが來ちよつて居つちよる、愉快々々、霹靂一聲夢覺めて、ウンライテンライ、イックバックノバー〳〵。

●イヨ節（神戸）

○神戸名所は楠さまよ、サイショネ、松が見えますほの〴〵と、松がネ、見えますイヨほの〴〵と。

○舞子男松湊川女松、サイショネ、中の福原客を待つ、中のネ、福原イヨ客をまつ。

○舞子濱から帆をまき上げて、サイショネ、神戸港へ走りこむ、神戸ネ、港へイヨ走りこむ。

●草履取遊（神戸）

○草履隱し、くねんぼ、橋の下の鼠が、草履をくはへてチウ〳〵〳〵。

●兩拳（神戸）

○デン〳〵ホイ（男兒）

○チユンケン三ッゼヽ三ッ（女兒）

●雜謡（西成郡傳法村）

○傳法村にてばくちをせぬは石の地藏と烏宮。

○ほん〳〵云ふのも此村なれば川と川との稻づゝみ。

○實意明石の島おじやれ浪にいひたい事がある。

○沖の白帆どこまでかへる無事とたよりを内の人。

○松に吹くさへ古郷の風よ心地よいぞや夕涼み。

東海道

伊賀國

●天氣天象の唄

○天狗さん風お吳れ、風が無きや、錢おくれ。
○雪はチラ〳〵、雲は灰だらけ。
○星さん獨りぼしで出ぬもんぢや、千も萬も出るもんぢや。

●正月唄（上野町）

○正月さんどこまで、富士の山の裾まで、さいとく餅入れて、かぶり〳〵ござつ

た。
○正月三日に何嬉れし、雪より白い飯食べて、割木見たいな魚添へて、巨燵に煖つて寢んねこしろ〳〵。

●遊戯唄

○おちよ笠〳〵、手につく金は、大津へ越えて、大津はお馬、殿さんお出るか、弓箭持つて、お茶粥滴ぼして、も一かへり歸りました。
○たゝみはなんぼ、十三匁五分、も些とお負け、お負けはならん、そんならお通り。
○子買ふ、子買ふ、子に何食はす、砂糖饅頭、そりや蟲の毒よ、茶漬に香の物、そりや咽が渴く、赤の飯に魚の菜、そりや骨が刺さる、捲つて食はす、小骨が刺

さる、しがんて食はす、それは宜らう、何所々々寢さそ、二階の隅で、鼠が引くワ、金襴緞子着せて寢かそ、それは宜かろ、早ほり籠に入れて嫁入さそ、チチカ、カア。

○子供衆、子供衆、何花折りに、躑躅花折りに、一本折りては腰に差し、二本折りては笠に差し、三本目に日が暮れて、上の庄屋で泊ろか、下の庄屋で泊ろか、上の庄屋で泊つて、曉起きて空見れば、右のよい女郎で、一杯飲んでは兵五郎どん、二杯飲んでは兵五郎どん、三杯目の肴には、白瓜赤瓜きんかうりイ。

○昔辨慶の鎌太郎は、夜晝熊野へ參るとて、熊野の路で火が消えて、とぼしても〳〵點らいで、まつこと點らん事ならば、城山崩して胡麻蒔いて、こゝの周圍へ砂撒いて、一桶二桶三桶、櫻五葉松柳、柳の枝に、鳶の巣と烏の巣と、ねぢよを

あて、長老が見つけて、錢一文遣ろぞ、一文位いらん、二文遣ろぞ、二文も要らん、三文遣ろぞ、三文貰ろて、一文で飴買うて、二文で女房、女房は誰や、博多のおかめさん、おかめさんには無い、ついたりはたいたり、はたき團子。

●七夕（上野）

○一年に一遍の七夕さん、鬼灯取つてもダンナイカ（大事ないか）

●盆踊唄（上野）

○日にち暮しの朝顏さへもヨー垣にもたれて思案する、ハアチンテン〳〵、垣にもたれてナー　ヨーオ思案するよアレハヨイ〳〵〳〵。

○盆ぢや〳〵と盆待兼てコラショ盆の浴衣も出來やしよまいア、ヨーオイサツサ

○圓くなれコラセ、十五夜の月の樣に圓くなれヤットコマカセノドツコイショ。

○あねさん待たんせ、饅頭やろ、饅頭やろヲ、それ食て血を吐く怖ろしや、怖ろしや。

○姉さん袂で蟬が鳴く、何と云ふて、白歯でみもちはおいとしやおいとしや。

○四角なアれなアれ、ヱッ四角なれ、油屋の桝の様にしィかアくなれア、チンアンチン。

●船唄

○急げ早漕げ、桑名の船頭、やがて熱田の宮に着く。

○大淀よいとこ朝日をうけて、七つ下がればじやこがひ渡る。

●馬士唄

○馬は物言ふた鈴鹿の關で、娘女郎なら乗せよといふた。

●山伏踊唄（名賀郡）

○愛宕さんの山伏は、千人揃ひでみね（峯）入するに、愛宕の山を今朝立ちて、伏見こかたを打ち過ぎて急げば早よ着く山ざきへ〜、山伏踊を踊ろよ〜。

○山崎名所を今朝立ちて、木津の渡をお渡りやりて、急げば早よ着く大和まで〜山伏踊を踊ろよ〜。

○大和の名所を今朝立ちて、梨原峠を早打ち過ぎて、むだの渡しをお渡りやりて急げば早よ着く吉野まで〜、山伏踊を踊ろよ〜。

○七月七日と申するは藏王さんのおまへにて、山伏達が集りて、とそけんぞろへを召され候〜、山伏踊を踊ろよ〜。

○吉野の奥のみ山かせぎて、山伏とめたワやれ、珍しや、九十九關の關さへ破る

破れ易すさよ〜〜〜山伏踊を踊ろよ〜〜。

●手鞠唄（上野）

○トン〜〜トン、年の初めは、祝ひ嘉く、松と竹との、中に浪花の梅の花、水の蛙も、三十一文字、御代も八千代と、開く椿の、香ます、殊に都ぞ、花の錦の音羽山、躑躅山吹、宇治の里では、心頼政、妻に菖蒲を、思ひ貫ふてストン〜〜、秋の初めは、化粧朝顔、桔梗刈萱女郎花、踊る調子も、菊の花笠、月にキラ〜〜、露の玉置く萩薄、鶉鳴くなる、道に深草、四位の少將、小野の小町に、心通天、名をも高雄の、流す龍田の川紅葉、花も數々、並ぶ鶏頭の、時雨霰に、眞木の山茶花、檜葉の花、まだも清きは、花の水仙、年の暮こそ併に花咲く、音はポン〜〜ストントン。

●動物唄

○鴉々〜〜、どんがらす、後の鴉先になれ、わが家が燒けるぞ、早よ行つて水かけよ杓が無けら貸して遣ろ。

○鴉どん〜〜、己の口は眞黑け、鴉が牛見て笑ふたげな。

○しろこ（東京にて大綿と いふ羽虫なり）どんござれ、甘酒飲まそ。

○猿が紅滴ぼした、阿父さん歸つたら云ふて遣ろぞ。

○燕、とんぼ、呼んで來な、巣碎く。

伊勢國

●木遣唄

●皇太神宮御木曳道歌

○湊濱邊に拾ふもうれし、ミヨモ、ユタカニエ、人のうき世を「イサムデ、わすれ貝ソレトモニ、シラガノハヘルマデ、サーサ、ヒケ〳〵、ヒケーヤヒケー。

○過ぎし昔を花橘「ミヨモ、ユタカニエ、しのぶ袂に「イサムデ風かをる「ソレトモニ、シラガノハヘルマデ、サーサ、ヒケ〳〵、ヒケーヤーヒケー。

○酒はほろよひ、娘は二八「ミヨモ、ユタカニエ、花はさくらのイサムデ、さかりなへ「ソレトモニ、シラガノハエルマデ、サーサ、ヒケ〳〵、ヒケーヤーヒケー

○汗のみち干に、清むる網場「ミヨモ、ユタカニエ、お木に玉ちる「イサムデ浪

の花「ソレ、トモニ、シラガノハエルマデ、サーサ、ヒケーヒケーヤーヒケー。

○神の御苑の、花さく頃や「ミヨモ、ユタカニエ、心うきたつ『イサムデ、春景色「ソレトモニ、シラガノハエルマデ、サーサ、ヒケ〳〵、ヒケーヤーヒケー。

○宮木曳にと出ていさむ日は「ミヨモユタカニエ「おいも若やぐ「イサムデ春の空「ソレトモニ、シラガノハヘルマデ、サーサ、ヒケーヤーヒケー。

○ためしかはらず千代萬代も「ミヨモ、ユタカニエ、小野の湊の「イサムデ、車びき「ソレトモニ、シラガノハヘルマデ、サーサ、ヒケ〳〵、ヒケヤー、ヒケー。

○木曳歸りに、いざ立寄らん「ミヨモ、ユタカニエ車にえんある「イサムデ、櫻花樓「ソレトモニ、シラガノハヘルマデ、サーサ、ヒケ〳〵、ヒケーヤーヒケー

●同

○君が齡は千歳の松に、鶴がやどりて舞ひ遊ぶ。

○御木は木曾山谷々越えて、清き流れの宮川へ。
○手曳き袖ひき御神の恵み、笠もすれ合ふ伊勢の春。
○昇る朝日を二見が浦の、うつす鏡や海の面。
○げにや其名も高倉山に、月も隈なく照り渡る。
○伊勢の濱荻名は立石の、清き渚や二見潟。
○忍び忍びて隠が岡に、明けて目出たき岩戸山。
○花の名所の數ある中に、御屋根の櫻は錦江に。
○堅き契りは千枝の杉よ、變るまいぞや幾年も。
○浮き名たて石氣は鸚鵡石、姿見かはす鏡石。
○車々へ積む御木の數、ひけや納むる宮の中。
○空に霞の網手もひくや、神の都の花ぐるま。

○雪は跡なき御山のまつに、かゝる霞や春の色。
○氏子氏子の御頭まふや、笛の音する土手が原。
○春の彌生の汐干に見れば、霞がくれのくゞり島。
○色香ゆかしく、鏡の宮に、咲いて影みる花の顔。
○霞む糸遊長閑き空に、上る湯田野の夕雲雀。
○春の錦は藤岡山の、松の緑に小紫。
○老も若やぐ今年の春よ、車賑ふ北御門。
○笛や皷の拍子に連れて、植女うたふや御田の苗。
○此處をせに鳴け山田が原の、杉の木の間の時鳥。
○夏の夕は川邊の里に、小舟うかべて螢狩。

○名さへ涼しき清水が杜に、風も木蔭を止めて吹く。
○三津の浦曲に夕波高し、萩の上葉に風や吹く。
○松もなびかぬ音なし山に、秋は來て鳴く鹿の聲。
○いつも年ある豐宮崎に、千代と囀づる稻すゞめ。
○松の木の間にもみぢ葉染めて、秋の錦の林崎。
○伊勢の海つらさやかに見えて、清き渚の月の影。
○君をことぶき取る白石の、數もつきせぬ神の前。
○神の惠に數々見えて、民の竈に立つ煙。
○國のしづめと仰ぐも高し、動きなき代の宮柱。

●同臨時御遷宮木遣歌（古市町）

○ホンエー、神の惠でヤーエー（ヤットコセヨー、イヤヨー）サリトテハ、人氣がそろうて、一時に木がうく、ヨーイトナー（ハーレハ、ハラリヤリヤ〳〵、ヨーイソコ、ヨーイソコセー）
○……御木の水あげ……綱さきそろへて、みんなが木をやる……（……は前同斷）
○……伊勢の宇治橋……下には網うけ、上ではまりほる。
○……朝日かゞやく……日本の兵隊、うそにも負けぬぞ……。

●道唄（本調子）

○木曾の山家でナー、そだちますれど、ソレ〳〵、今は五十鈴の宮ばしら、ソリヤホンニ、ヤウキシヤナー、タハムレシヤンスナエー。

○霞むなかゝら……木ヤリの聲が……もれてのどけき五十鈴川。

○ういた〳〵と……木をせりたて……皆がのぼせる五十鈴川。

○流つきせぬ……五十鈴の川を……千代のためしにひく宮木。

○神の惠で……淵瀬をこえて……高き宮居へ木をよせる。

○御木にうかされ……五十鈴をのぼる……青き流にうつるかげ。

○もとが流と……きをひく人に……見せてやりたい五十鈴川。

○清き流の……五十鈴の川へ、……人の山つく木やりうた。

●伊勢音頭

●櫻ぶすま（備前屋の唱歌）

櫻花誰が畫くにも盛りとは
移り易すさよ世の中の
ぱつと浮名を流しては
散りも初ぬ一木には
調子の高い三味線に
鶯鳴けばほゝえみて
かざり車や五所車

言ひ合はさねど人心
戀は莟の開くまで
曲水結ぶ谷影に
誰も目をやる幕の内
座頭は散るを待ち顔に
振り袖口にあでやかな
御室あたりの夕顔に

花の顔みる樂みも
人目無ければ一枝は
緣を結ぶの短冊に
どよむは山の笑とも
あからめなせぞ朝ぼらけ
嵯峨野に通ふ人ならむ
霞に筆をかすらせて
青きは清き水の色
北野詣での沓の音
鞍馬の山のふこおろし

かつぎひとへに關の戸に
手折る心を抱かれて
風一吹きの散り際を
實にや名におふ嵐山
明け放したる月の間は
梢にか、る一筋の
空色うつる大堰川
白きは瀧の清水や
太刀持つ稚兒の戯は
遙かこちらは紫の

幕うちはへて獵の音
一日かさの森さして
へりとりかりて後手に
繪そらごとにも花咲いて

●菊のことぶき

神風の伊勢の古市ふる事の
酌みてぞしるき菊の酒
さいつ押へつ盃の
しどけなりふりらん菊の
はぎの白菊あらはになれば

花も聞き入る風情して
獨靜かに寺の緣
つく〳〵思ひ廻らせば
實もある御代のへ

(杉本屋の唱歌)

其の山水を今こ、に
飲めばときめき氣も浮かれ
數も八重菊八重かさなれば
さそのべにきてほろ〳〵と
仙家の客はよそにのみ

見てややみなん床入は
はやせやはやせ笛太鼓
ひく三味線や琴箱の
夕べは又も鶏鵡石
流れの身にし五十鈴川
閨の睦言いひすぎて
あちら向いたる片葉の蘆の
中なほりすりや濱荻の
二つ枕のいなおふせ鳥
おはしますかは知らねども

しばし岩戸の戀のやみ
鼓が岡の鶴の聲
二見と今朝は別れても
いとしと言へばいとしと答ふ
清き心の誠づく
唇寒し秋の風
びんとすねては見すれども
濱の眞砂の盡きせぬえにし
屏風の内は何事の
有りがたきは萬年の

後の命は君次第
神のかしこき惠をこめて

●重ね盃（油屋の唱歌）

千代萬めぐりつきせぬ
五十鈴ならねど潔き
めで給はればいよ〳〵と
情の通ふ君達の
上の下のと取る手も狂ふ
是ぞ價のなき寶
竹の葉影に汲みなさぬ

ぢやらりくらりの千早振
何時まで菊の宿で久しき
八重霞くむ長閑さは神風の
流れの泉色も香も
花に傚ふてちらりとそこに
心任せに紐ときて
豐かな御代に遇ひあふは
露もこぼさずすなほなる
飽かぬ契のわかしには

あけの唇ぬりくりと
傾けさ、げ亂れざし
言の葉種に言ひしれず
始め給ひしにぎみたま
なみ〳〵うける數のさかづき

●間の山節（本調子）

ゆふべあしたの鐘の聲
聞いて驚く人もなし合
鳥は古巣へ歸れども
野邊より彼方の友とては
寂滅爲樂と響けども
花は散りても春は咲く
行きて歸へらぬ死出の旅合
金剛界の曼陀羅と
月花み雪一呑みに
肌も柔ぎ氣もくつろぐは
實にや妙なる神わざを
うれし〳〵く何時までも

胎藏界の曼陀羅に
血脈一つに珠數一連
これが冥途の友となる

●お杉お玉の歌

○伊勢で宇治橋外宮に内宮、八十末社の宮廻り「間の山ではお杉お玉が、縞さん紺さん中乘りさん岩戸樣へは道續、二見が浦では朝熊山、伊雜めぐりに、太々神樂に、これな申し、よてかんせ。

●お杉お玉

一節小屋立番の年增女客に錢を投げさせる官業に

○親方さんテ、お杉の顏へ投げてヤランセ、ホッテヤランセ、ナゲテヤランセ、ホッテヤランセ。

二等小屋の女は云ふ

○親方さんテ、ナゲサンセ、縞さんナテ、ボラサンセ。

三等小屋小兒に付添ふ女の言いとしづかにして

○ヲ、クレナテ、親方サンテ、一文ナテ、ホカブリサンテ、紺縞サンテ、イトサンナテ、アノ兒ガナデ、踊るにナテ、八卷サンテ、ヲ、クレナテ。

●伊勢參り歌

○お伊勢まゐらわば、ヨイ〳〵、朝熊あを、かけえて、あるよーいせえそをこせ、朝熊はあゝゑ、かけえはあまや、そをれえさ、かわたさあん、ぐ、ぽんまかや、あ、とこをせ、え、よを、いやな、あ、りやりや、これわのせえ、さあよをいとせえ。

○色で身を燒く八百屋の娘、あ、よをいせゑとをこせ文句あ、十四と云へばあよい物を、十五と云ふたばかりに、あ、科の次第が極まりし、ぬき身の鎗を後や先、傳馬町から小傳馬町、江戸町々を引廻され、江戸町々の娘子が、あれが八百屋のお七かなあ、色が白うて目が黑て、銀の簪落し挿し、吉三さんなあゑ、迷ふたは、それえさあ、無理はない、こりやこりや、やあとこせえゝ、よういやな、あゝりやりや、これわいせえゝ、さあよういとせえ。

●關の宿の戀歌

○宮は朝船、四日市どまり、關の地藏はすぐ通り。

●祭禮唄

●石採祭（桑名）

○大勝利を御承知か、蟹が（蟹とは蟹城のこと）もゝ（桃は瀧川の定紋）はさんで（挾んでとは長島より宮海道にて挾み擊にせし由）はさみち切つて、ほつたつた。

○おかつさんは内にか、蟹が□□はさんで、はさみちぎつて、ほつたつた。

○大神樣は社にか、蟹が小石を挾んで、神の社へほつたつた。

○氏子人民打揃ひ、神に玉串納めて、惡しきけがれをほつたつた。

●伊雜宮御田植祭

兄若丸

一つ、雲雀は麥田に巢くふ小鳥
二つ、
三つ、
四つ、夜々山になく梟
五つ、伊雜に來て啼く千鳥
六つ、群がり飛び立つ雀
七つ、渚に來て啼く千鳥
八つ、燒野に子を戀ふ雉子
九つ、小池に水鷄の番ひ

弟若丸

一つ、ひらけて世の中繁昌
二つ、深いが親子の間
三つ、みごと
四つ、世の中千代萬代に
五つ、いつまでつきせぬ御代は
六つ、昔も今も變りはあらじ
七つ、
八つ、大和の世はをさまりて
九つ、此年々豐年

十、

●歳時唄

○神都盆踊伊勢音頭

●松風村雨（神風館五代櫻路作）

旅すがた、坊主は元は鬚男、佛も元はえびをりの、昔男の行平に、松に行脚の行き暮れて、木の下蔭を宿とせば、今宵のあるじ松風と、よそに聞いても袖ぬらす其の村雨のふり合せ、他生の縁も看經（默然として經文なみること）の、老を庵に須磨の浦一人寢覺のあゝはれて、灘の鹽くみ、なだの潮くむ浮身ぞと、見れば月こそ桶にあれ、影は二つ月は一つのうつくしさ、ゾット身にしむ鹽竈の、咽かわかせて旅僧も、

かたずを呑んで松島や、小島の海人の袖ならで、これは松風村雨が、鹽燒衣いろかへて、かとりのきぬの裏見ても、かへらぬ昔なつかしき、行平の中納言、三歳はこゝに須磨の浦、みやこのぼりのかた身とて、御立烏帽子かりぎぬも、薄き契と思はれて、これを見る度にいやましの、思ひ草、忘れ草にもかたみこそ、今は仇なれこれなくば、忘るゝひまもありなむと、歌にもよみし鹽ふきの、深き思ひの物狂ひ、アレ〳〵アレに我が思ふ、御立姿若緑、いやとよそれはそらめぞやあれは松にて在原の其の人にてはなきものを、うたての人のいひごとや、まつこそ戀よまつ人よまつが戀なり松かさも、拾てはおかれず取れば又、かづく袖笠立ち分れ、歸り來んとの言の葉の、色はかへてもよその目に、それはいなばの遠山松これはなつかし君こゝに、須磨の浦曲の松の雪、ヒラサラ泊らんせ、よそのサ

娘と外の女郎衆と、あほらしなんじやいな、我は木影に腹立浪の、そなれ松のなつかしき、松に吹き來る夜嵐に、夢はやぶれて旅衣、村雨とぬれしも、けさ見れば松風ばかりは殘りける、千代萬代のへ。

●郭公

ほとゝぎす、横雲はらふ朝風に、花橘の香に匂ふ、昔しのばせ柴の戸に、しめやかに降る雨の音、軒の玉水しと〳〵と、琴の調も奥深く、山路くらしつ山かつの、渡る掛橋たわゝなる、煙草の煙り輪になりて、みすもる聲はさげ髪の、戀やこもれる此原に、かの糸すゝき茂りたる、胸の思ひはかやり火の、まつ夜更け行く鐘の音に、ひとりつくりし立姿、澤のほとりの杜若、いづれ菖蒲の白々と、夕顔の花の露けくて、濡れにぞ濡れし湯上りの、笹ふく風の涼しさは、蓮のそよ

ぎも夏たけて、靜に見ゆる尼寺の、菩提導びく渡舟、ぜゝの白浪布さらす、女に岸の青柳は、みだれ亂れしさゝがにの、軒端をつどふそれきりに、夕ぐれ高き雲の峰、峰たちならぶ都のふじの長枕、たなびく海の面などやかに、治る御代のへ

●盆踊唄（度會郡南部）

○うんそれ、サーヨーイ〳〵ヨーイトナー、それよい、ちよんがいなーとふんだら泥餡をふみだして、晩にはござんせどじやう汁くはそ、ちよんがいなー。

●同（四日市日永村）

○お前に貰ろた半纏は、四日市のお山に欺され質に置き、こちや構やせぬ。
○つとめすりやとてわごれの樣な、やぼなしやくすりやあしもする。
○お前に貰ろた煙草入は、河邊の柳に引掛忘れた、こちや構やせぬ。

●盆唄

子供の踊ひ歩行く其歌に

○踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らな損ぢや

○赤い湯もじに迷はぬものは木佛金佛石ぼとけ。

○芋食て蛸食て五色の屁をふるヨイヤサ、ヤレコラセ、ソリヤ、ドツコイトセ。

●蟲送（三重郡四郷村大字八王子村）

○出て行け、出てけ、出てかな燒くぞ。

●雨乞（四日市附近）

○さあさ降れよ、さあ降れよさ、ざら〳〵よ〳〵。

●亥子唄（四日市）

○ねの子の晩に、祝はん者は、一世一代出世せんぞ……。

○ねの子の晩に、重箱ひろて、開て見たら、ほか〳〵まんじ握りて見たら重兵衛さんの口口、も一つおまけに祝ひましよ。

●勞作唄

●田植唄（四日市）

○今や世が好て穂に穂が下がる、升は取りおけ箕ではかる。

○濃い茶煮出したに婆樣も御座れ、嫁の惡口云ふて飲もに。

○五月五日はお多度の祭り、御座れ香取の茶屋で待と。

○御座るたんべに牡丹餅ならぬ、茄子漬食てお茶參れ。

○面白いぞへ五月の月は簑や笠着て後へはう。

●同　（長島）

○前見りや青田や、後ろ見りやあねさん、畔つきや煙草ぢや。

●茶摘唄　（四日市）

○お茶を摘むなら根茶から摘みやれ、根茶は目もきく葉も溜る。コリヤ〳〵。
○五月五日はお多度の祭り、おされ香取の茶屋で待つ、コリヤ〳〵。
○お茶をひ出すなら箕前を上げて、向ふへよい茶の飛ばぬよに。
○茶撰りさせぬが、ありや私しの妻、製茶に預けて置くわいな。
○茶撰りして養ひますが末は女房としてお呉れ。
○お茶師番頭様に進げたい物は墨と硯と矢立てと筆と金のなる木と算盤と。

○もんで粉にして色をば落しや、何處の山でも草鞋はく。
○暑い〳〵はお茶師の癖に暑かあふいで進げましよ。
○茶撰りや二階でお茶師は下よ、同じ商賣でも裏表。
○お茶の茶の茶の茶の木の本で、お茶も摘まずに色噺。
○しなもみさんでも、すりや子が出來る、できた其子が青臭い。
○宇治の新茶と大和の古茶と、出合ますぞへ横濱で。
○お茶をかかうなら壺入れてかこへ、娘かこふならおばとなる。
○お茶師さんと聞きやなつかしい、私しの間夫ちやんもお茶しさん。
○お茶し番頭さんが盲目ならよかろ、お茶の小言がなうてよい。

●手鞠唄　（宇治山田地方）

○おとん、とんとん、とんと今宵は、遊び過して、歸る道には犬が鳴やら、狼が鳴やら、轉けて額を叩つやら、あいたゝ、こいたゝ、今宵ばかりで、もう行きやせんに、腹も頭も病だ事ないが、今年始めて此子をもうけて、若しや此子が男の子なら、髪をしやんと結ふてお寺へあげて、お寺御椽から突落されて、一分二分する鼻紙袋、誰が拾ふたか開けても見たが、中に書いた物恥かしや、恥かしや恥かしや。

○伊勢の御宮のおくら子樣は、顏は白壁目は水晶、立てば芍藥座れば牡丹、歩行姿が百合の花、百合の花〳〵。

○一に水仙、二に杜若、三に下り藤、四に獅子牡丹、五ついやまの千本櫻、六つ紫鹿の子に染めて、七つ南天、八つ山吹で、九つ小梅を散らしにかけて、十で

豐久野伊勢の松、伊勢の松〳〵。

○向ひ婆さん椽から見れば、菊や牡丹や手鞠の花や、行けばよう來た上れとおつしやる、上りや茶々呑め吸付煙草、煙草吸へとは辱ないが、金のお手鞠、天鵞絨の手覆、阪は照る〳〵鈴鹿は曇る、間の土山雨が降る、雨が降る〳〵

○向ふの舟は誰の舟、お萬と小女郎と遊ぶ舟、遊はじんじよでよけれ共、舟の中で子もけて、其子の名は何とつきよ、八幡太郎と付けやんせ、八幡太郎の產衣は梅をちつくり散らして、櫻をちつくり散らして、染て下んせ紺屋樣、染る事は安いが、一分や二分では染らんに、うこん染にしとかんせ、私の大事の一人子に、うこん染が着せらりよか、着せらりよか着せらりよか。

○じアん〳〵寺から、お蛇々が出て來て、恐い蛇にやげな嘘言じやげな、嘘言じ

やげな〜。

○常燈の後に何やら光る、金か小判か一寸見て來たら、寺の和尚さんの目が光る、目が光る〜。

○お萬何處へ行く京へ上る、京でお萬が死んだなら、岩をくづして石碑に建て、樒の花で水向ける、水向ける〜。

○白鷺は〜、小首かたげて二の足踏で、あるく姿は百合の花、百合の花〜、

「ソコ一點ジャー貸シマシタ。

○白鷺は〜、散るや紅葉や、一二三四五十鈴川原の秋の暮、秋のくれ〜、ソコ一點ジャー貸シマシタ。

○日本に名高き此の人々は、一ッ秀吉、二ッ藤房、三ッ道眞、四つ頼朝、五ッ一

休、六ッ武藏坊、七ッ楠公、八ッ日本武、九ッ弘法、十で德川家康、家康ぢや家康ソコ一點ジャー貸シマシタ。

○げん〜花と相樸取花と、結び合して手襷に掛て、十郎兵衛樣はどこらに御座る、一の門越えて二の門越えて、三の門四の門ぎり〜ともうて、立派な御庭に井戸堀かいて、井戸は卷井戸釣瓶は黃金、水汲む女の化粧の水、化粧の水〜ソコ一點ジャー貸シマシタ。

○向ふの細道やさしが通る。やさしの腰元眺めて見れば、印籠巾着箱入煙草、御手にはしんちゆう長棹もつて、あの鳥さしたや此の鳥差したや、飛んで行きたや名古屋の城は、高い城で一段上り二段上り、三段上りて東を見ればヨイヨイ小供が二三人御座る、一によいのは一やの娘、二によいのは二のやの娘、三によいの

は酒屋の娘、酒屋娘は色黑でござる、色は黑ても派手者ござる、あちら向かんせ髪結て進上、此方向かんせ化粧して進上、髪もいやいや化粧もいやいや、玉木櫨兵衞さんの櫻花より色白い、色白い〳〵ソコ一點ジャー貸シマシタ。

○雪になりたや御山の雪に、解けて流れて御池へ落て、御池の水は竪横女郎衆の化粧の水・化粧の水、化粧の水ソコ一點ジャー貸シマシタ。

○大事の姫御を受取て、お返し申すが君枝さん(友の名)あなたも落すと恥じやぞな私も落すと恥やんな、お尻の捲くるが御承知かなソコ一點ジャー貸シマシタ。

○張比に、五代退たら算用勝たら、德用退花、辰の一二、三代の姉さん、小三三六、歳は四六で、丁が五十で、さくが九十で一寸突いたついた、處で、じさん婆さんが、金銀の杖につかれて、六日年越七草、七草の、せちを頂き、ご萬歳とは

十ようせ、二十せ、三十せ、四十せ、五十せ、六十せ、七十せ、八十せ、九十せ、百一貫貸しました。

○正月さん正月さん、何處なで御座つた、裏の酒屋の椽迄御座た、をどりほしや石なごほしや、突ら飛、雉子の羽根ほしや、羽根がほしけりや、じふどへあがれ、じふどは羽根のつきどころ、つき處〳〵ソコ一點ジャー貸シマシタ。

○天神樣の梅の木は、百舌鳥がすはりて琴を彈く、琴の響で花が散る、散たらだいじか咲たらだいじか、五代三代咲花を、さく花を〳〵ソコ一點ジャー貸シマシタ。

○鶯は〳〵、今年は船で伊勢參宮、伊勢の小枝の二の枝へ、柴かきよせて巢を組んで、十二の卵を生み揃へ、親もろともに立つときは、黃金の銚子へ酒ついで、

舞へよ大黒謡へよ夷子、中で酌とる福の神、福の神、福の神。

○昨夕伯母さん汽車にて歸り、濱の縮緬澤山もろた、何に染めよと紺屋に問へば一に糸柳、二に庭櫻、三にさがり藤、四に獅子牡丹、五ッい山の千本櫻、六ッむらさき鹿の子のしぼり、七ッ天南八重山吹、九ッ小梅を散して、十でトウチク(唐竹ならんか)おとなしや〜〜〜。

○白鷺は々々々、小首かたげて二の足ふんで、やつれ姿の水鏡〜〜〜。

○木枯に〜〜、散るや紅葉の一二三四、五十鈴川原の秋の暮〜〜〜。

○鶯は〜〜、たま〜〜都に登ろとて、梅の小枝へ晝寢して、其のお夢はなんと見た、むしろ三枚ござ三枚、六枚屏風をひきたてゝ、ほろり〜〜と泣かしやるは錦襴緞子のおくびをつけて〜〜。

○昨夕產けた、小鼠は、月代剃つて髪置いて、前田の橋を渡ろとて、蟹にセンコを挾まれて、あ痛ヤこいたや、蟹どの、御前の弟の千松は、七ッ八ッから金山へ菊の花を折りに、一本折つては腰にさし、二本折つては手に持つて、三本目には日が暮れて、兄の庄屋へ泊らうか、弟の庄屋へ泊らうか、兄の庄屋へ泊まつて、朝起きて見れば、大黒さんといふ人は、一に俵をふんまへて、二ににつこり笑はして、三に杯さし上て、四つ世の中よいやうに、五ついつもの如くに、六つ無病息災に、七つ何事もないやうに、八ッ屋敷をひろめて、九ッ小倉を立てそめて、十でトーンと治まつて、十一萬歳福の神、十二は藥師の手にたゝき、鐘がわれたらないたげな。

○深山がくれに咲く花も、都大路に咲く花も、花に二つはなきものぞ、草の庵に

住む人も、玉の臺に住む人も、人に二つはなきものぞ、暫しのひまも怠らず、學の道に勵みなば草の庵もいつしかに、玉のうてなと代るべく、深山がくれに咲く花の、都の春にあふ如く、末は富たる身とならむ、末は富たる身とならむ。〳〵。

○花の名所をかぞへて見れば、一によいのは大和の吉野、二によいのは吾妻の隅田三によいのが三都の中に、たぐひあらしの山櫻〳〵。

○聟どりい山に、うぐひすは一羽ね、あいつさしてくりよとて竿とりなほして、竿で取れなきや、はやぶさで取つてくりよ、あやをわすれて、鈴鹿山茶屋、一に橘、二に庭櫻え、三に下り藤、四にしろぼたんえ、五ついやまの千本櫻え、六ッむらさき色よく染めてね、七つなんてん（南天）、八つ山吹をね、九つ小梅を

ちらしに散めてえ、十で殿さん葵の御紋ね、竹に雀は仙臺さんの御紋ね。

○巡禮々々〳〵、ろくじゆんれい、伊勢のはりまの、つくしまの、つくしま小舟を見て來た〳〵乘つて來た、こぎよせ〳〵こぎよせて、此處はどこやと問ふたらば、此處は霧島、きんじよ島、八月筍、かんなすび、それさへもとめて下されば、袷の一枚こて（買ひて）着せて、じばん（襦袢）の一枚こて着せて、衣裳きせて〳〵〳〵。

○ぎり〳〵まるやま、どつこの東、東を見れば、御門のとびらに、おさよとかいてね、おさよさしたる、すげをの櫛はね、〳〵、誰にもろたか、源次郎さんに貰ろたかね、源氏男は、はでしやでござるね〳〵、わたしやみこんで、みもちになつたのね、みもち幾月、七月八月ね、そこでおさよが涙がほろ〳〵。

○一おいてきんしょう、わしや石ほらん(抛た)、小供ならこそ、石ほるけれど、二おいてきんしょう、わしや庭はかん、丁稚ならこそ、庭はくけれど、三おいてきんしょう、わしや三味ひかん、藝者ならこそ、三味ひくけれど、四おいてきんしょうわしや皺よらん、ぢさんならこそ、皺よるけれど、五おいてきんしやう、わしや碁をうたん、旦那ならこそ、碁を打けれど、六おいてきんしょう、わしや牢へはいらん、盜人ならこそ、牢へはいるけれど、七おいてきんしょう、わしや質おかん、貧乏ならこそ、質おくけれど。

●同（鈴山地方）

○向へ通りやる竹松さんは、鐵砲かついて雉子うちに、雉子は山中出て走る、こゝへ上つてお茶でもあがれ、お茶も新茶も御無用になされ、此家の娘にちよとほ

れて、□□□□るのはどち□、東枕にまどさして、爺さん婆さん起きやんせ、七ツになる子も起きさんせ、そこ〳〵一たい貸ました。

○此所は一身田こくで……の高田こくだの如こく如來、百やどん十こく十で、おほがさこゝまりよか、それそこ一たい貸ました。

●同（津市）

○毎日學校へ行く者は、人に禮義を忘るなよ、朝の日を出て行く時は、父と母とに手を附いて、しからば行つて參ります、家に歸りし其後は、仰もあらば用事して、用事過ぎたら學校で習ひしとこの復習を、忘れぬやうにするがよい、途中で知るべに逢ふたらば、必ず挨拶忘るなよ、朝も學校へいつたらば、教師と共に禮をなし、遊歩時間のれんげには、履ものなんどに氣をつけて、他人の物と間違が